

い れい ばる
伊礼原遺跡

— 図録集 —



2006(平成18)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

伊礼原遺跡はキャンプ桑江北側半分（40.5 ha）が平成15年3月に返還される事前の平成7年度から平成9年度に実施した文化庁補助事業による埋蔵文化財の試掘調査で発見された遺跡です。

遺跡は平成8年度の調査で発見され、九州縄文時代前期の曾畑式土器を主体とする多量の土器、石器、イノシシ、リクガメ、魚貝類など他種類の遺物が出土しました。その中でも種子や樹木などの有機質の出土は大変貴重で、その植物相から古環境が再現できるほどで、多数の基礎資料が埋もれていることが判明しました。

このことから、平成10年度より平成14年度まで範囲確認調査を進めてきました。その結果、遺跡の後方丘陵の麓より流れる湧き水「ウーチヌカー」を利用して、縄文時代早期から晩期、弥生時代相当期、グスク時代、更には戦前の集落まで人々の痕跡が連綿と続き、沖縄諸島の編年が網羅できるほどの履歴が判明したとの報告を受けています。さらに、新資料の発見もありました。特に木製品で縄文時代前期の網代や石斧の柄、同中期の大型容器、同晩期の櫛など大変貴重なものであるとともに、往時の人々の技術面の高さには目を見張るものがあります。また、直接九州との交流を示す遺物も確認されるなど行動の広さにも驚嘆させられます。

このような先人の育んだ足跡をたどれる遺跡、そして自然環境との共存関係を把握できる情報を持つ遺跡は県内においてこの伊礼原遺跡以外には例がないことから、文化庁や関係研究者の方々から重要性を告げられ、今後は国指定重要遺跡として保存・活用の方法を検討するようにとのご助言もいただいております。

今回、このようなご助言に対して、これまでの調査で判明したことや出土遺物を図録集にまとめ、町民をはじめ、県内外の方々及び研究者や関係機関に紹介し、伊礼原遺跡のことや私達の住んでいる地域の歴史と文化財の重要性をご理解していただき、活用されれば幸いに存じます。

今後とも文化財の保存と活用に際し、町民の方々のご協力と研究者や関係機関からのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覽 朝宏

例 言

1. 本報告書は「伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」、として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側半分の約40.5haを3年度にまたがる試掘調査及び範囲確認調査（平成10年度～平成14年度）をおこなった中で特に伊礼原遺跡の結果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した25,000分の1は、国土地理院の承認を得て北谷町役場が作成したものである。
3. 遺跡・遺物の同定は下記の方々に依頼した。記して謝意を表します。
石 質：大城 逸朗 堆積学：松田順一郎
貝 類：黒住 耐二 獣魚骨：樋泉 岳二
4. 辻誠一郎氏・能城修一氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。
5. 炭素14年代測定は、辻誠一郎・渡辺誠・甲元真之の科学研究費と地球科学研究所で行った。
6. 本書の編集は中村愿で行った。執筆は下記的人员で行い文末に記してある。
中村 愿 東門 研治 島袋 春美
尾木 綾 細川 愛 仲村 毅
7. 資料の整理は下記的人员で行った。
上間真寿美 豊里 初江 山城小百合
東 順子 佐久間クリエ 田仲美智子
八田 夕香 呉屋 広江 瑞慶覧 亮
花城 直子 稲嶺恵利奈 富平砂綾子
8. 本書に掲載した伊礼原遺跡の発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物の全ては北谷町教育委員会に保管している。

報告書抄録

ふりがな	いれいばるいせき							
書名	伊礼原遺跡							
副書名	図録集							
巻次								
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書 第25集							
シリーズ番号								
編著者名	中村 愿・東門研治・島袋春美・尾木 綾・細川 愛・仲村 毅							
編集機関	北谷町教育委員会 社会教育課							
所在地	〒904-0103 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL098-936-3159							
発行年月日	2006年(平成18年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃			
いれいばるいせき 伊礼原遺跡	おきなわけんなかがみぐん 沖縄県中頭郡 ちやたんちようあざくわえ 北谷町字桑江 ばんち 226番地	ちやたんちよう 北谷町		26° 19' 14" 119	127° 45' 38" 318	19970201 ~ 20030331		キャンプ 桑江基地 返還に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
伊礼原遺跡	低湿地	縄文時代早期		爪形文土器・石器(石斧)			縄文時代前期の貯蔵穴1基(0.9m四方)を検出。同時期層で植物塚と貝塚が確認された。 九州より搬入された曾畑式土器(滑石混入)が確認された。	
		縄文時代前期	貯蔵穴(筧)	曾畑式土器・木製品(柄・杭・箆・構築材等)・石器(石斧)・骨製品・糞石・堅果類・種子類				
		縄文時代中期		面縄前庭式土器・木製品(容器)・石器(石匙)				
		縄文時代後期		面縄東洞式土器・木製品(櫛)				
		縄文晩期		宇佐浜式土器				
		弥生時代相当器		浜屋原タイプ				
		グスク時代		グスク土器・中国産陶磁器				

本文目次

はじめに

例言

報告書抄録

第一章 調査に至る経緯	1
第二章 調査経過	1
第三章 層序	2
第四章 出土遺物	84

図目次

図1：北谷町の位置と遺跡分布	3
図2：爪形文土器(上)・曾畑式土器-滑石混入(中)・ 曾畑式土器(下)	39
図3：室川下層式土器(上)・仲泊式土器(下)	41
図4：晩期系土器(上)・くびれ平底土器(下)	43
図5：壺形土器(上)・グスク系土器(下)	45
図6：木製容器上面・断面図	76
図7：木製容器正面図・側面図	77
図8：木製品(丸木杭・石斧の柄)	79
図9：木製品(櫛)(材質：ヤエヤマコクタン)	80
図10：伊礼原遺跡の各時期の海岸の変遷	96
図11：伊礼原遺跡(低湿地)の地形図	97
図12：伊礼原遺跡(低湿地)の基本層序	98
図13：縄文時代早期の様相	99
図14：縄文時代前期の様相	100
図15：縄文時代中期の様相	101
図16：縄文時代後期の様相	102
図17：縄文時代晩期の様相	103
図18：弥生時代相当期の様相	104
図版5 上：中央区上半分の層序	10
下：層中のカワニナの混在状況	
図版6 上：中央区北側で検出された戦前の水田畦の状況	11
下：同上	
図版7 上：③水田址にみられる亀甲状クラックの状況	12
下：同上	
図版8 上：北東区南壁面の状況手前北側には岩盤の石灰 岩の水摩を受けた露出がみられる。	13
下：北東区北壁面の状況(中央区の第XI~XVIが 欠ける)	
図版9 上：南区北側第IX層にみられる樹根の検出状況	14
下：樹根間の土器出土状況	
図版10上：中央区南壁面と曾畑層面の状況	15
下：同西壁面と曾畑層面の状況(北側に小礫が集 中しそれ以北にはない)	
図版11上：中央区西壁と曾畑層面の状況	16
下：同東壁面と曾畑層面の状況	
図版12上：中央区西壁面(中央やや左黒い部分下で櫛が 出土)	17
下：櫛の検出状況(上層からの溝下でみられる)	
図版13上：南区の礫層面の状況(右側礫層上面(第XI層 縄文中期)と左側礫層(XIV層縄文前期)面)	18
下：第XIV層中の遺物の出土状況	
図版14上：南区南壁面と礫層上面の状況(左側が木製容 器、右側が板と石器類出土状況)	19
下：板と石斧2点・刃石1点の出土状況	
図版15上：南区南東角で木製容器の検出状況	20
下：同木製容器の検出状況	

図版目次

図版1：戦前の伊礼原遺跡周辺(1945年 米軍撮影)	5
図版2 上：伊礼原遺跡の遠景(西側上空より)	7
下：伊礼原遺跡発掘区の近景(南側より)	
図版3 上：グリット設定の状況 下：中央区の状況	8
図版4 上：中央区南壁上半分(西側)	9
下：中央区南壁上半分(東側)	

図版16上：南区から北区を望む（礫層・XIV層の検出状況、 北区には拡がらない）……………21	図版34：室川下層式土器（上）・ 仲泊式土器（下、試掘No.30-旧ロッジ跡試掘）……40
下：南区と中央区の礫層の状況（曾畑層の貝類と 獣骨の検出状況）……………21	図版35：晩期系土器（上）・くびれ平底土器（下）……42
図版17上：中央区サブトレンチの礫層の状況 （曾畑層上面）……………22	図版36：壺形土器（上）・グスク系土器（下）……………44
下：同上 遺物出土状況……………22	図版37：爪形文土器（口縁部）……………46
図版18上：中央区南壁面の状況（左下面が箆取り上げ後 の状況）……………23	図版38：爪形文土器（胴部）……………47
下：西区サブトレ曾畑層の遺物出土状況……………23	図版39：曾畑式土器（口縁部）……………48
図版19上：南区サブトレンチの礫層の状況（曾畑下層）……24	図版40：曾畑式土器（口縁部）……………49
下：同上 遺物の出土状況……………24	図版41：曾畑式土器（口縁部）……………50
図版20上：南区曾畑層下面獣骨の出土状況……………25	図版42：曾畑式土器（胴部）……………51
下：同上 貝類の出土状況……………25	図版43：曾畑式土器（胴部）……………52
図版21上：南区曾畑層下部の海獣の出土状況……………26	図版44：曾畑式土器（胴部）……………53
下：同上 海獣の出土状況……………26	図版45：曾畑式土器（底部）……………54
図版22上：北区曾畑層下部の石斧の出土状況……………27	図版46：面縄前庭式土器（口縁部・胴部）……………55
下：同上……………27	図版47：仲泊式土器（口縁部・底部）……………56
図版23上：中央区東側曾畑層 箆が出土前の状況 （左上の大型礫が中心部）……………28	図版48：面縄東洞式土器（口縁部）……………57
下：同上 箆周辺部の掘り出し状況……………28	図版49：面縄東洞式土器（口縁部）・伊波式土器・型式不明…58
図版24上：箆東側にみられた網目……………29	図版50：晩期系土器（口縁部）……………59
下：箆保存処理後の状況……………29	図版51：晩期系土器・弥生系土器（口縁部・胴部・外耳）…60
図版25上：箆切り取り中に東壁面に検出された掘り込み痕…30	図版52：浜屋原式土器（口縁部）……………61
下：中央区南東角に堆積した破碎されたシイの実層……………30	図版53：後期系土器（口縁部）……………62
図版26上：北区南側第XVII層で検出された爪形文土器と 軽石堆積ライン（右下）……………31	図版54：後期系土器（口縁部・底部）……………63
下：爪形式文土器の検出状況……………31	図版55：後期系・グスク系土器（口縁部・胴部・底部）…64
図版27上：爪形文土器の検出状況……………32	図版56：青磁・白磁・染付・本土産陶磁器……………65
下：同上……………32	図版57：沖縄産陶器・陶質土器・古銭……………66
図版28：中央区 南壁面（剥ぎ取り）……………33	図版58：石斧……………67
図版29：南区 東側壁面（剥ぎ取り）……………34	図版59：石斧……………68
図版30：土層剥ぎ取り……………35	図版60：定角式片刃石斧・磨製石鏃・敲石……………69
図版31：埋め戻しの状況……………36	図版61：石皿（上）くがに石様石器（下）……………70
図版32上：1998年日本考古学会沖縄大会の伊礼原遺跡の 見学会……………37	図版62：黒曜石・チャート……………71
下：同上 中央説明者は渡辺誠先生……………37	図版63：貝製品……………72
図版33：爪形文土器（上左）・曾畑式土器・滑石混入（上右）・ 曾畑式土器（下）……………38	図版64：骨製品（骨針・骨錐・装飾品）……………73
	図版65：骨製品（海獣骨製板状製品）……………74
	図版66：木製容器（材質：ショウナンボク）……………75
	図版67：木製品（丸木杭・石斧の柄）……………78
	図版68：木製品（櫛）（材質：ヤエヤマコクタン）……80
	図版69：自然遺物……………81
	図版70：自然遺物……………82
	図版71：ハイガイ（上）糞石・琥珀（中）炭化種子（下）…83

第一章 調査に至る経緯

伊礼原遺跡はキャンプ桑江北側返還に先立つ事前の試掘調査で平成9年3月18日に発見された遺跡である。

キャンプ桑江北側半分は平成15年度末に返還されたが、返還前の調整段階である平成7年度から返還予定地と関連施設40.5haを3区分し、3年間で試掘調査を行い開発側との調整の基礎資料を作成することを目的として行われた。その後は、開発面積の約10%を試掘調査の対象面積とする文化庁指針の下により、遺跡の範囲の確定と遺構の有無について人力による範囲確認調査を行ってきた。その結果、伊礼原A遺跡と伊礼原C遺跡が保存に値する遺跡であることが判明した。

当初、低湿地で発見された縄文前期の曾畑式土器をはじめとする部分を伊礼原C遺跡として命名した。西側に広がる沖積平野部の砂丘地に縄文時代中期の炉と柱穴、後期の竪穴住居址、晩期の方形遺構、弥生時代前期の壺と石斧、グスク時代の柱穴群、近世の集落址まで連綿と続く生活址が発見され、その生活址を伊礼原A遺跡として使い分けを行っていた。しかし、両者の遺跡の性格が判明するにつれ、A遺跡が生活址、C遺跡が低湿地の調理場で同時期の遺跡であることが明らかになった。また、保存を前提とした町構想検討委員会でも伊礼原A・伊礼原C遺跡と呼ぶのには問題があるとの指摘もあり、町文化財調査審議会でも同様な見解であった。幸いにもアルファベットのAがスタートであることから、字名の伊礼原遺跡でまとめることで判断が下された。

よって、今後は伊礼原A遺跡と伊礼原C遺跡をまとめて伊礼原遺跡として統一することとした。

第二章 調査経過

平成8年度で発見された伊礼原遺跡は、平成10年度から人力による範囲確認調査に切り替え本格的に発掘調査をすることになった。当初は縄文時代の層を確認することで行ったが、近世の様相も必要であるとの判断があり、特に沖縄諸島で未検出である水田址の発見に努めた。

平成10年度は試掘No.143を取り囲むように6×8mのグリットを設定し、人力による範囲確認調査に切り替え本格的に発掘調査をすることになった。また、周辺部では特に東側の麓部分と丘陵部分に11本の試掘調査を行い、低湿地層の範囲の確認に努めたが、湧水のウーチヌカー以東には拡がり確認できなかった。よって、低湿地遺跡は試掘No.143から西側に拡がることが予想された。

平成11年度からは試掘No.143を中央区として位置づけ、その四方に5×5mのグリットを新たに設定し東区、西区、南区、北区とした。北区は背後の丘陵部まで約10m延ばし基盤石灰岩の露頭を把握することに努めた。しかし、北区は地下水の流出が多くまた、壁面の崩落が激しいことから中央部近くで第XⅦ層検出の爪形文土器の確認後は壁面保護の手当を行い終了した。北東側に改めて6×8mのグリットを設定し基盤石灰岩の把握に努めた。その結果、北東区では中央区の層序の上半分にあたる樹根層は確認されたが、その下位はXⅦ層の緑灰色のシルト層で中央区の縄文時代の層序がすっぽり抜けていることが確認された。岩盤の石灰岩の露頭も確認され、それらは水摩を受けノッチ状の形状をしていた。中央区のほぼ中央部を東側から西側へ流れる小川の痕跡が第XⅢ層上面までみられ、そ

の凹みから櫛の発見があった。

平成12年度は南区で集中的に調査を行い、第X I層で樹根群を完全な形態で検出した。樹根はマングローブやサキシマスオウノキで汽水域の植相であるとの所見であった。これらの樹根は中央区の小川に沿って南側に確認されたが、北側にはなく有機質のみであった。南区の第X II層の礫層上面で面縄前庭式土器や石斧・敲石が散在する近くで木製容器の発見があった。その後、中央区の第X IV層の東側で筧の発見があった。筧の周辺にはやや大きめの礫が数個点在し人為的な配置と判断されたが、筧のリウキュウチクの編目上面は流水によりもぎ取られ大型礫に絡まっていた。

平成13・14年度からは、南区の礫層や中央区の曾畑式土器層面の礫層が低湿地遺跡のキー層になると判断され南区、中央区、北区をつなぐ形で東壁面側に幅1mのサブトレンチを一直線に設け、さらに東区、中央区、西区にも南壁面側に幅1mのサブトレンチを設けて最下層面まで確認することとした。14年度の最終年度には壁面剥ぎ取りを2ヶ所でおこない終了した。

第三章 層序

伊礼原遺跡の低湿地部分の基本的な層序は中央区と南区が安定していて明確であり、第X VII層まで区分することができた。大別すると大きく3枚に区分することができる。

上半分のキー層は第X I層の樹根層である。樹根の年代は 1140 ± 60 であった。ポンプの故障や台風時の冠水の水位が常にこのレベルであることから有機質のパックはこの面から始まっている。樹根層の上下に流水によって洗われた陸生の白色シルト層があり、その上位層は有機質を含んだ灰色が黄色味を増し、褐色に変容して戦前の水田跡に至っている。それらの層中には粗密はあるもののカワニナが混在しており、褐色層の中でもやや青味を帯びた層が戦前の水田①を含み3枚の水田が確認された。水田②はグスク時代の頃で、水田③はマルタニシを含む古い水田であるという黒住耐二氏の所見がある。また、水田②と水田③の中間と樹根層の上面で地震の変形が確認されるという松田順一郎氏の所見がある。

中間の第X III層から第X IV層は礫層で、南区で厚く約1m堆積し、中央区や東区で薄くなり北区や北東区には至らない。南区の礫層上面で面縄前庭式土器と石斧・敲石の近くで木製容器の出土があり、木製容器の年代は 4460 ± 30 であった。礫層は南区と中央区の南側で上・中・下の3枚に区別でき、上・中・中の間に貝層と破碎されたシイの実が確認できる。中・下層にも大型貝や獣骨、石斧・石皿の検出面が確認できる。これらの礫層はカワニナを含み淡水域であることや、海生産のサンゴ等を含んでいないことから高潮時の暴浪で掃き集められたのではないかと黒住・松田氏の所見がある。筧の上面ももぎ取られた痕跡があることから曾畑式土器の時期にあったと判断される。曾畑式土器期の破碎されたシイの実の年代は 5020 ± 40 であった。

下位の第X V層が漂白された白色シルト層で、その下層が樹根層②にあたる。さらに下層が緑灰色泥層で爪形文土器出土の層である。北区のこの層で数個体の水摩を受けた土器と石斧が検出され、中央区よりで褐色の軽石面が河川敷の状態を確認された。この時期が最も海岸に近い時期にあったと判断される。土器の周辺で木炭の出土がありその年代は 5620 ± 40 の年代であった。

これらの層序の詳細については本報告にゆずりたい。

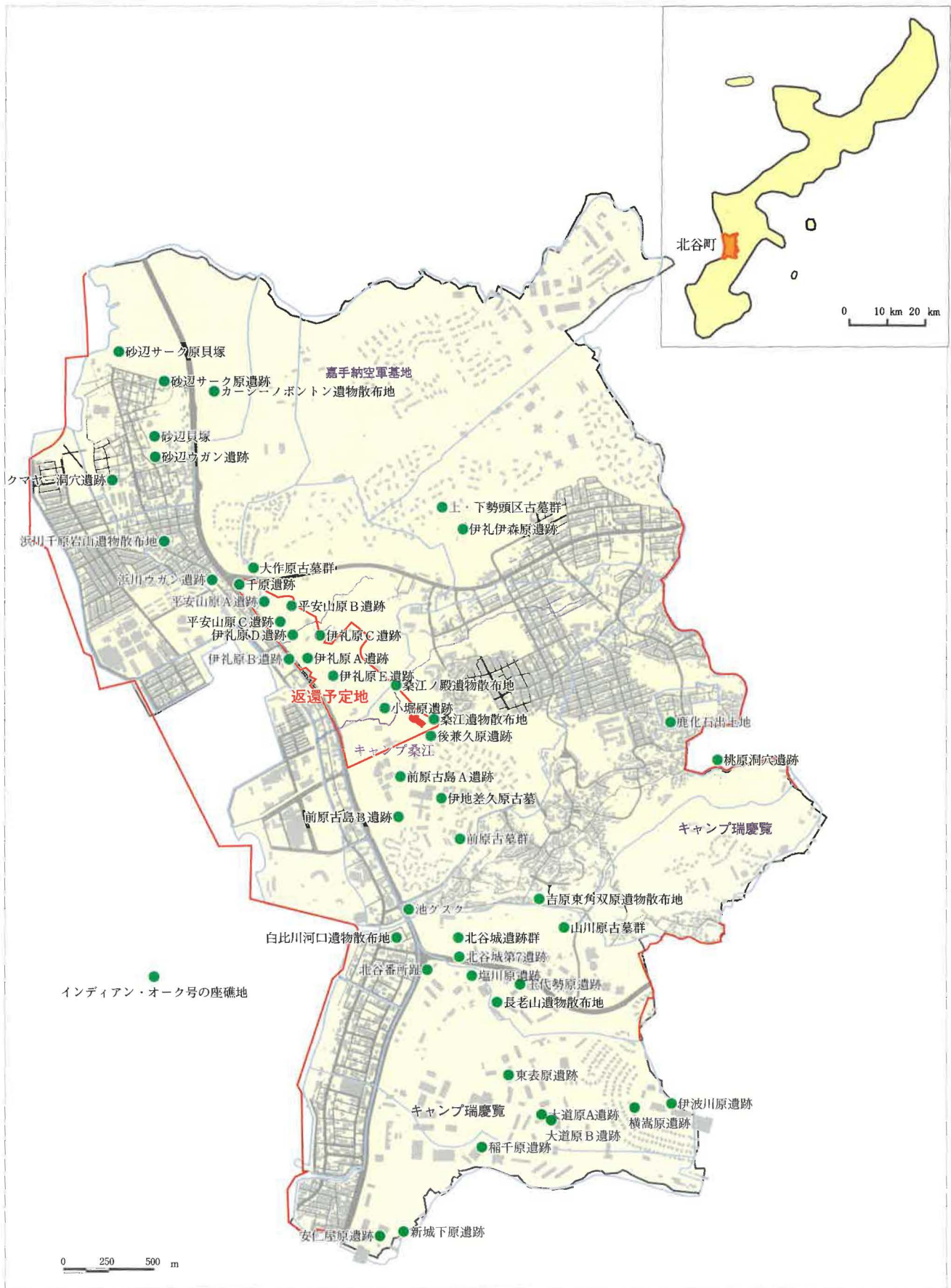


図1：北谷町の位置と遺跡分布図



図版1：戦前の伊礼原遺跡周辺（1945年 米軍撮影） 沖縄県公文書館所蔵『米軍撮影空中写真』ON24146 058-2（1945年2月28日撮影）より



図版 2 : 上 : 伊礼原遺跡の遠景 (西側上空より) 下 : 伊礼原遺跡発掘区の近景 (南側より)



図版3：上：グリット設定の状況 下：中央区の状況



図版4：上：中央区南壁上半分（西側） 下：中央区南壁上半分（東側）



図版5：上：中央区上半分の層序 下：層中のカワニナの混在状況



図版6：上：中央区北側で検出された戦前の水田畦の状況 下：同上



図版7：上：③水田址にみられる亀甲状クラックの状況 下：同上



図版8：上：北東区南壁面の状況手前北側には岩盤の石灰岩の水摩を受けた露出がみられる。
下：北東区北壁面の状況（中央区の第XI～XVIが欠ける）



図版9：上：南区北側第Ⅸ層にみられる樹根の検出状況 下：樹根間の土器出土状況



図版10：上：中央区南壁面と曾畑層面の状況
下：同西壁面と曾畑層面の状況（北側に小礫が集中しそれ以北にはない）



図版11：上：中央区西壁と曾畑層面の状況 下：同東壁面と曾畑層面の状況



図版12：上：中央区西壁面（中央やや左黒い部分下で櫛が出土）
下：櫛の検出状況（上層からの溝したでみられる）



図版13：上：南区の礫層面の状況（右側礫層上面（第XI層縄文中期）と左側礫層（XIV層縄文前期）面）
下：第XIV層中の遺物の出土状況



図版14：上：南区南壁面と礫層上面の状況（左側が木製容器、右側が板と石器類出土状況）
下：板と石斧2点・刃石1点の出土状況



図版15：上：南区南東角で木製容器の検出状況 下：同木製容器の検出状況



図版16：上：南区から北区を望む（礫層・XIV層の検出状況、北区には拡がらない）
下：南区と中央区の礫層の状況（曾畑層の貝類と獣骨の検出状況）



図版17：上：中央区サブトレンチの礫層の状況（曾畑層上面） 下：同上 遺物出土状況



図版18：上：中央区南壁面の状況（左下面が箆取り上げ後の状況）
下：西区サブトレ管畑層の遺物出土状況



図版19：上：南区ガトツの礫層の状況（曾畑下層） 下：同上 遺物の出土状況



図版20：上：南区曾畑層下面獣骨の出土状況 下：同上 貝類の出土状況



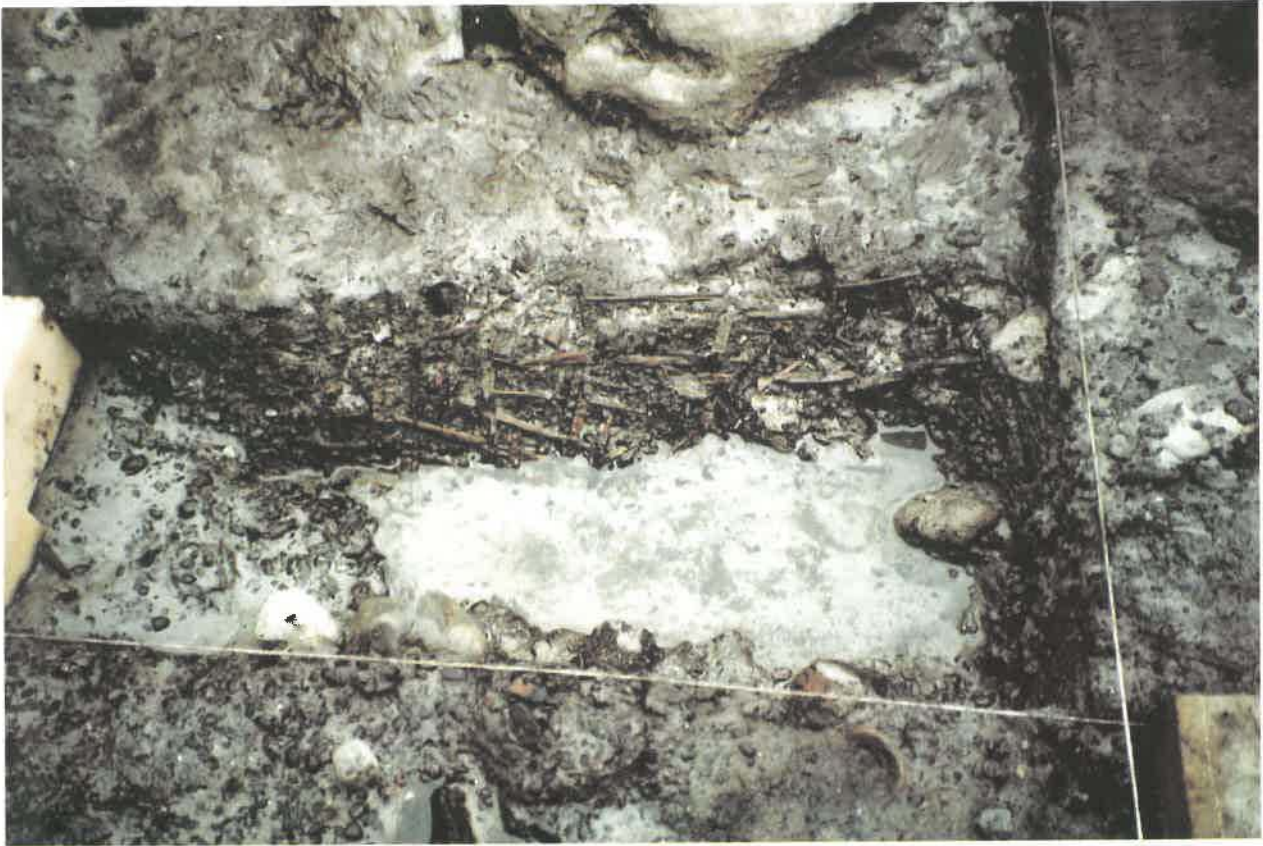
図版21：上：南区曾畑層下部の海獣の出土状況 下：同上 海獣の出土状況



図版22：上：北区曽畑層下部の石斧の出土状況 下：同上



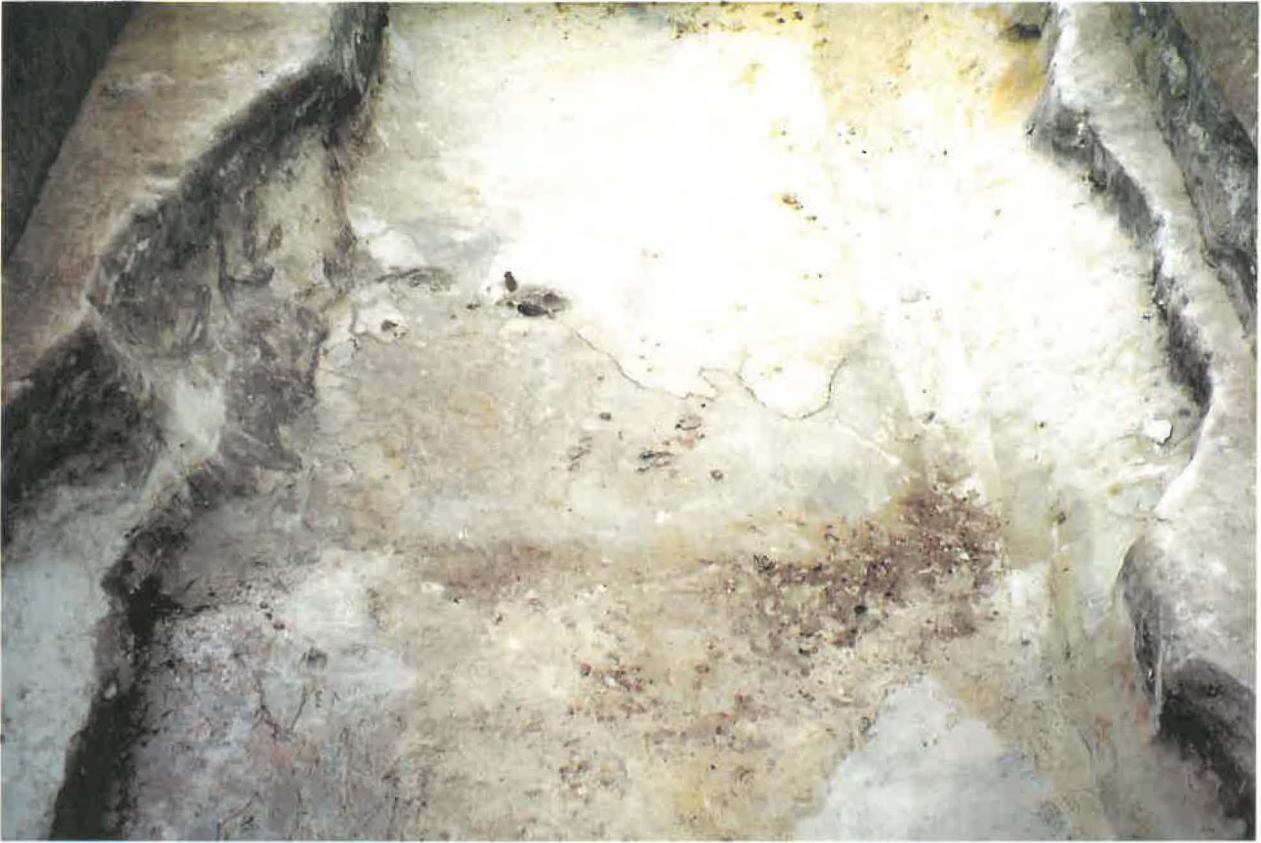
図版23：上：中央区東側曽畑層 筧が出土前の状況（左上の大型礫が中心部）
下：同上 筧周辺部の掘り出し状況



図版24：上：笹東側にみられた網目 下：笹保存処理後の状況



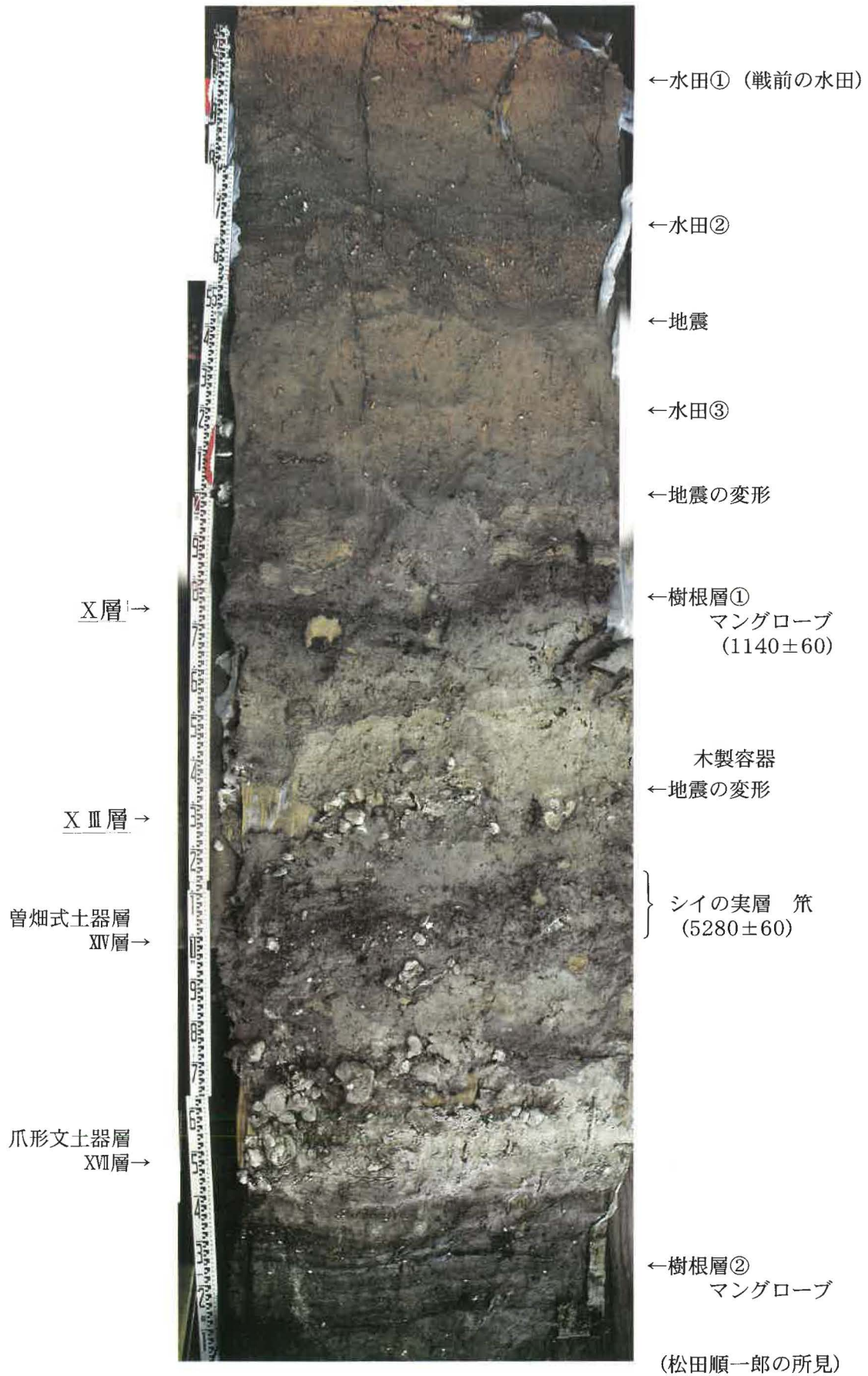
図版25：上：笄切り取り中に東壁面に検出された掘り込み痕
下：中央区南東角に堆積した破碎されたシイの実層



図版26：上：北区南側第XVII層で検出された爪形文土器と軽石堆積層（右下）
下：爪形式文土器の検出状況



図版27：上：爪形文土器の検出状況 下：同上



←水田① (戦前の水田)

←水田②

←地震

←水田③

←地震の変形

X層→

←樹根層①
マングローブ
(1140±60)

XⅢ層→

木製容器
←地震の変形

曾畑式土器層
XIV層→

シイの実層 箆
(5280±60)

爪形文土器層
XVII層→

←樹根層②
マングローブ

(松田順一郎の所見)

図版28：中央区 南壁面 (剥ぎ取り)



←地震の変形

←貝層

礫層中にもカワニナがあり
淡水域 (黒住耐二の所見)

浅海の堆積物を含んでない
ので高潮時の暴浪で掃き集
められたものではないか
(松田順一郎の所見)

←樹根層②
マングローブ

図版29：南区 東側壁面 (剥ぎ取り)



図版30：土層剥ぎ取り



図版31：埋め戻しの状況



図版32：上：1998年日本考古学会沖縄大会の伊礼原遺跡の見学会 下：同上 中央説明者は渡辺誠先生



图版33：爪形文土器（上左・曾畑式土器—滑石混入（上右）・曾畑式土器（下）

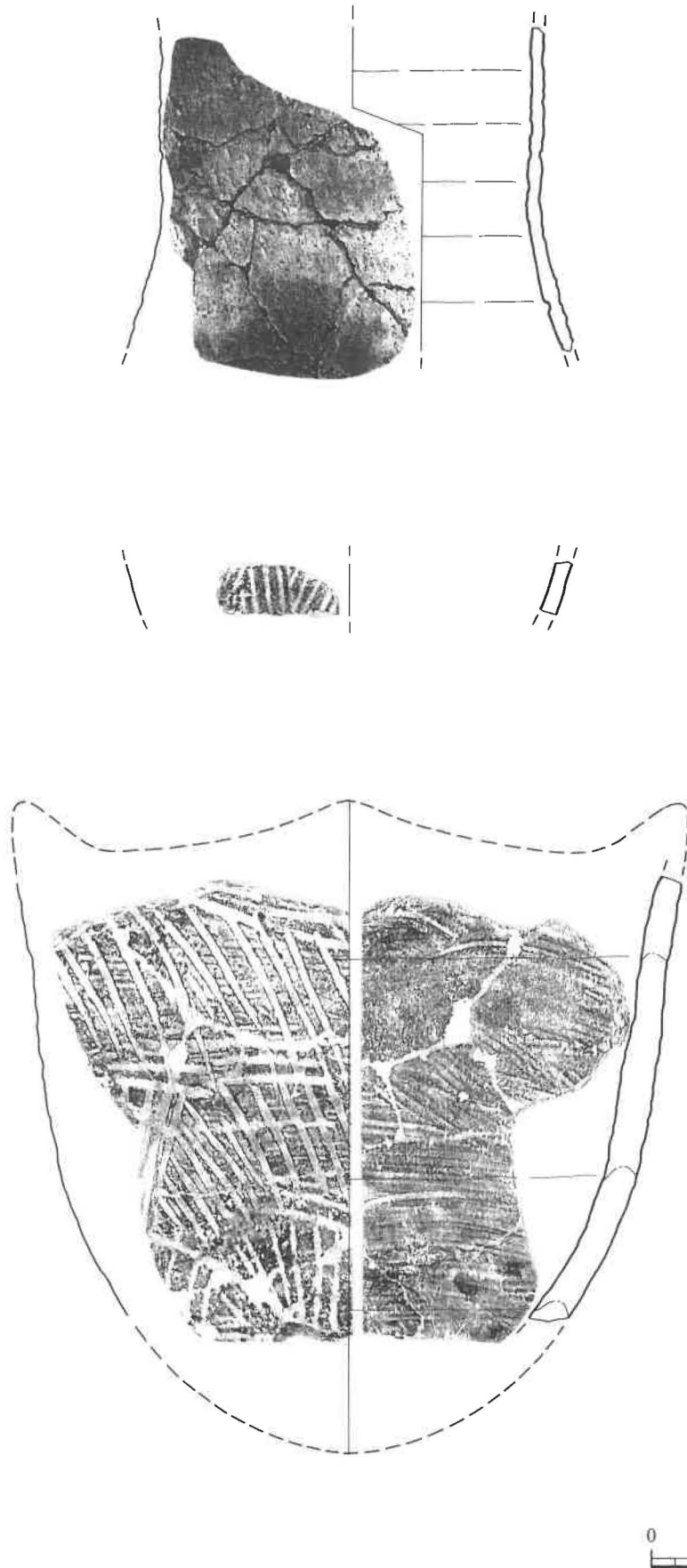


图 2：爪形文土器（上）· 曾畑式土器—滑石混入（中）· 曾畑式土器（下）



図版34：室川下層式土器（上）・仲泊式土器（下、試掘No.30-旧ロッジ跡出土）

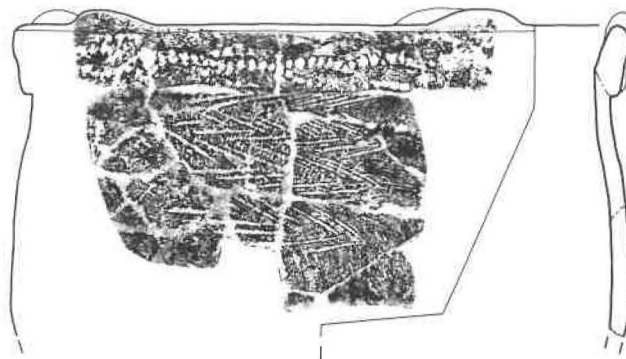
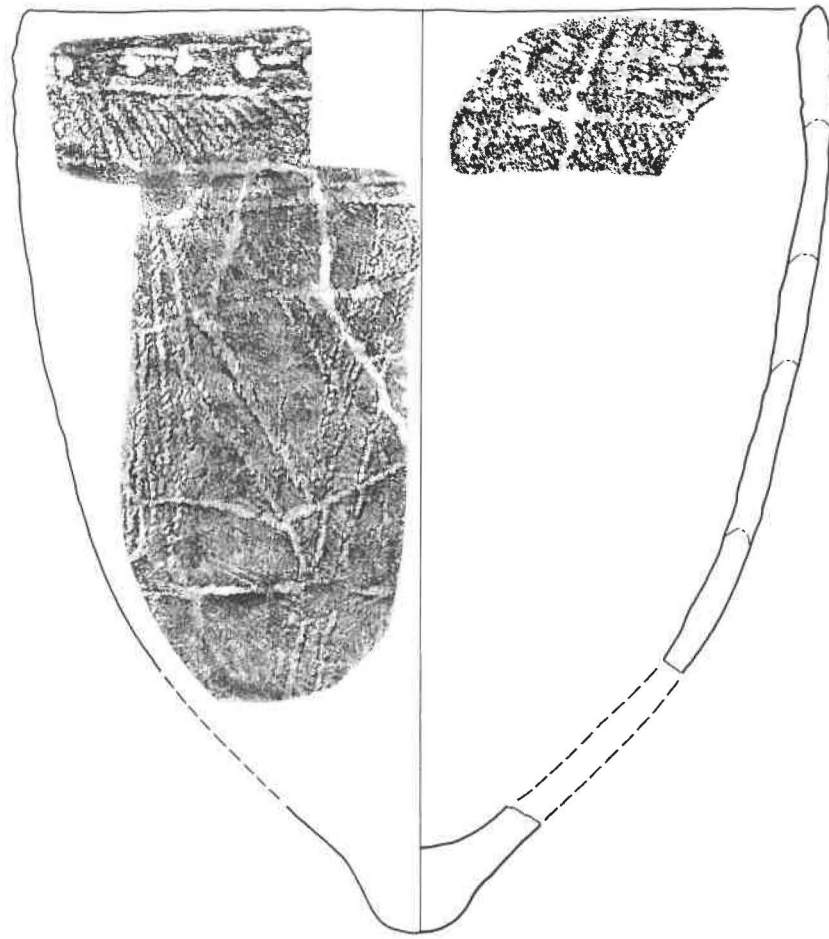


図3：室川下層式土器（上）・仲泊式土器（下）



図版35：晩期系土器（上）・くびれ平底土器（下）

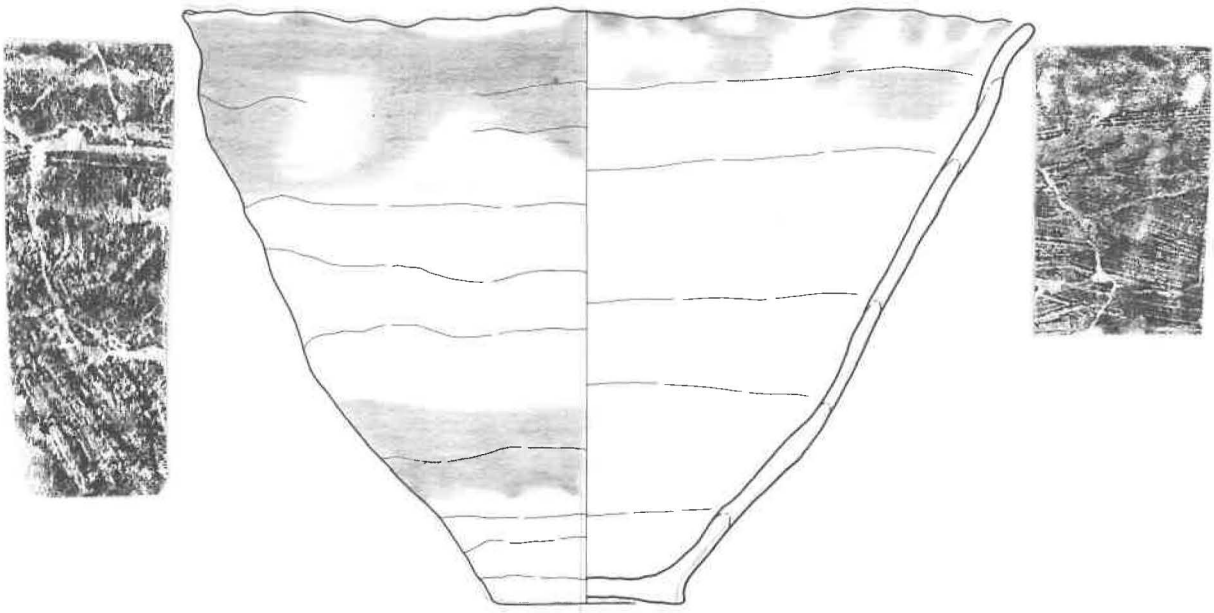
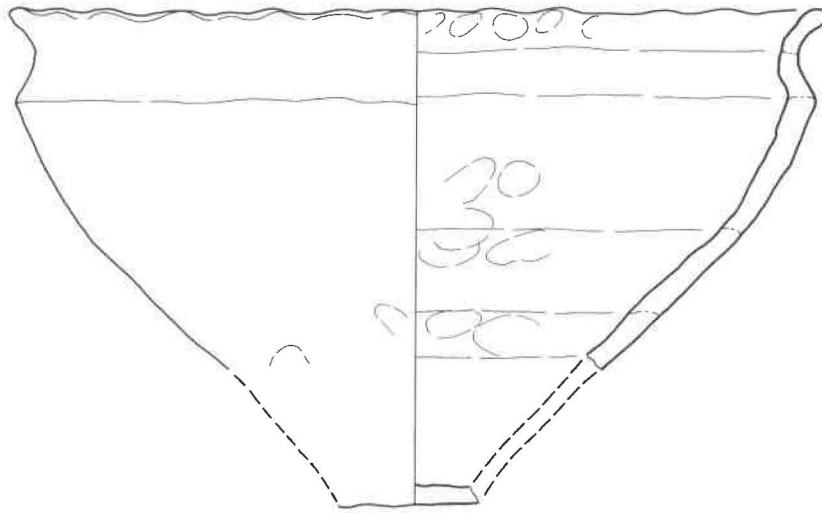


図4：晚期系土器（上）・くびれ平底土器（下）



図版36：壺形土器（上）・グスク系土器（下）

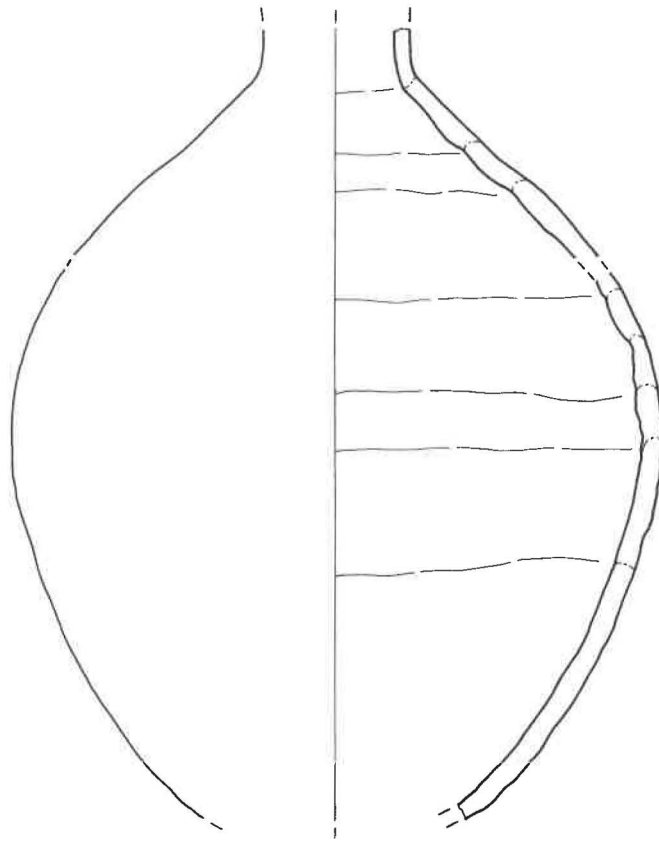


図5：壺形土器（上）・グスク系土器（下）



図版37：爪形文土器（口縁部）
上：表 下：裏



図版38：爪形文土器（胴部）
上：表 下：裏



図版39：曾畑式土器（口縁部）
上：表 下：裏



图版40：曾畑式土器（口縁部）
上：表 下：裏



図版41：曾畑式土器（口縁部）
上：表 下：裏（小型）



図版42：曾畑式土器（胴部）
上：表 下：裏



图版43：曾畑式土器（胴部）
上：表 下：裏（大型破片）



图版44：曾卣式土器（胴部）
上：表 下：裏



图版45：曾畑式土器（底部）
上：表 下：裏



図版46：面縄前庭式土器（口縁部・胴部）
上：表 下：裏



図版47：仲泊式土器（口縁部・底部）
上：表 下：裏



図版48：面縄東洞式土器（口縁部）
上：表 下：裏



図版49：面縄東洞式土器（口縁部）・伊波式土器・型式不明
上：表 下：裏



图版50：晚期系土器（口縁部）
上：表 下：裏



図版51：晚期系土器・弥生系土器（口縁部・胴部-外耳）
上：表 下：裏



図版52：浜屋原式土器（口縁部）
上：表 下：裏



図版53：後期系土器（口縁部）
 上：表 下：裏（上段・有文）



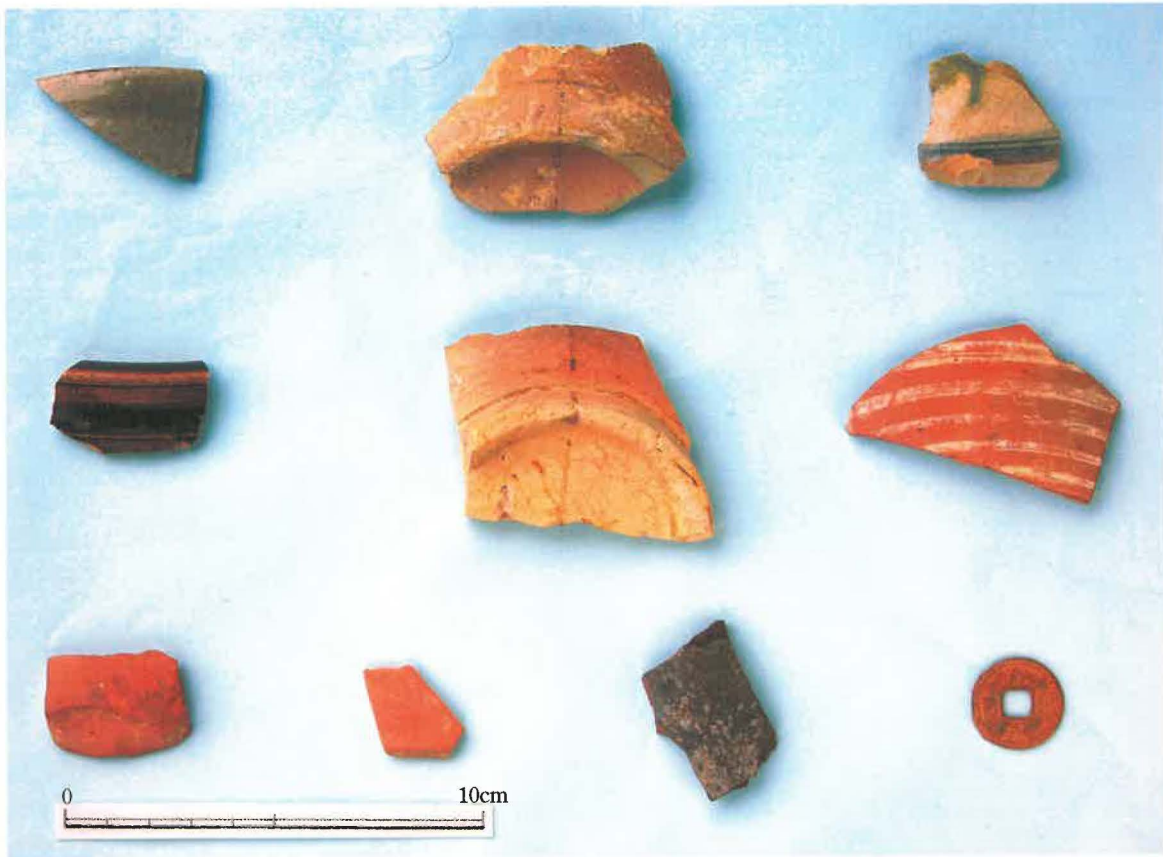
図版54：後期系土器（口縁部・底部）
上：表 下：裏



図版55：後期系・グスク系土器（口縁部・胴部・底部）
上：表 下：裏



図版56：青磁・白磁・染付・本土産陶磁器
上：表 下：裏



図版57：沖縄産陶器・陶質土器・古銭
上：表 下：裏



图版58：石斧
上：表 下：裏



图版59：石斧
 上：表 下：裏



図版60：定角式片刃石斧・磨製石鏃・敲石
上：表 下：裏

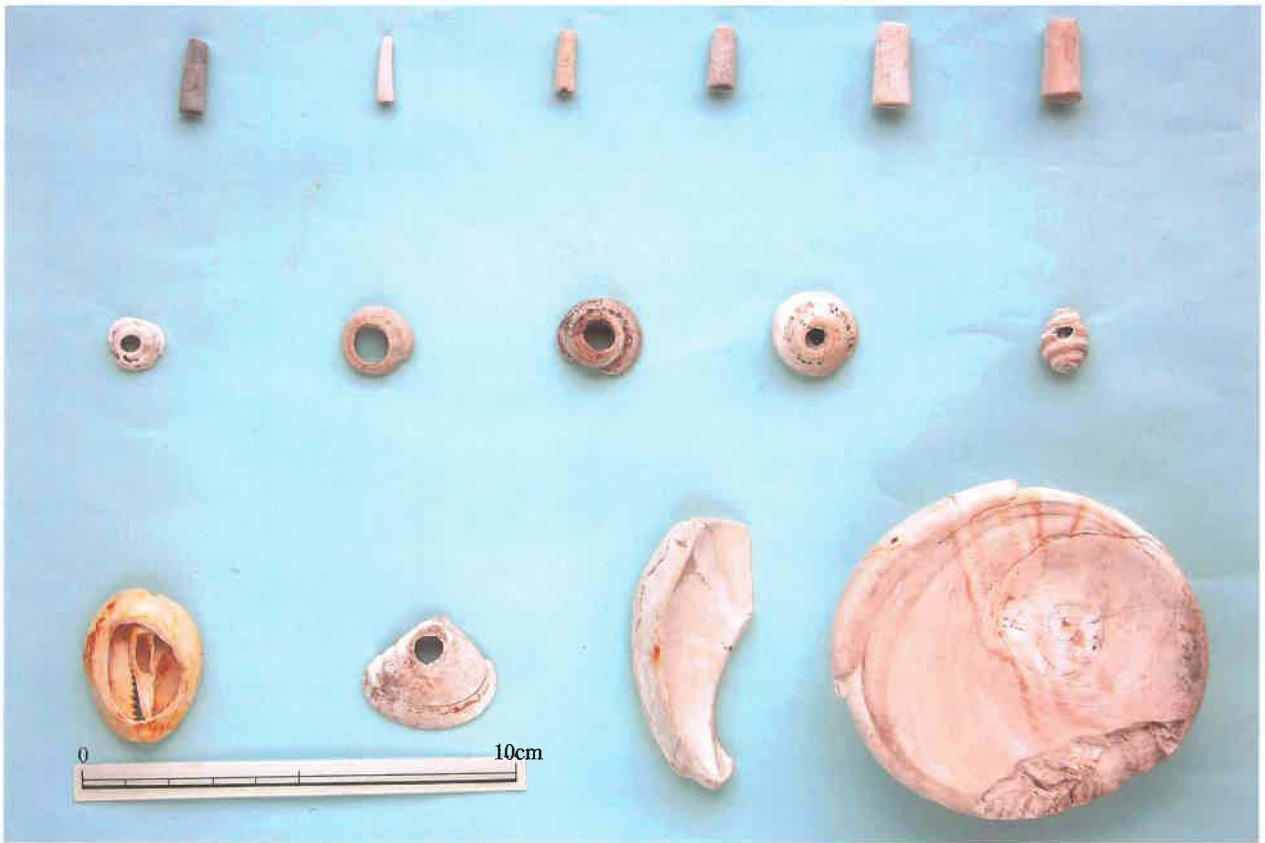


図版61：石皿（上）くがに石様石器（下）



図版62：黒曜石・チャート

上：黒曜石 中：チャート及びその加工品（石鏃） 下：石核



図版63：貝製品
上：表 下：裏



図版64：骨製品（骨針・骨錐・装飾品）
上：表 下：裏



図版65：骨製品（海獣骨製板状製品）
上：表 下：裏



図版66：木製容器（材質：ショウナンボク）
上：上面 下：側面

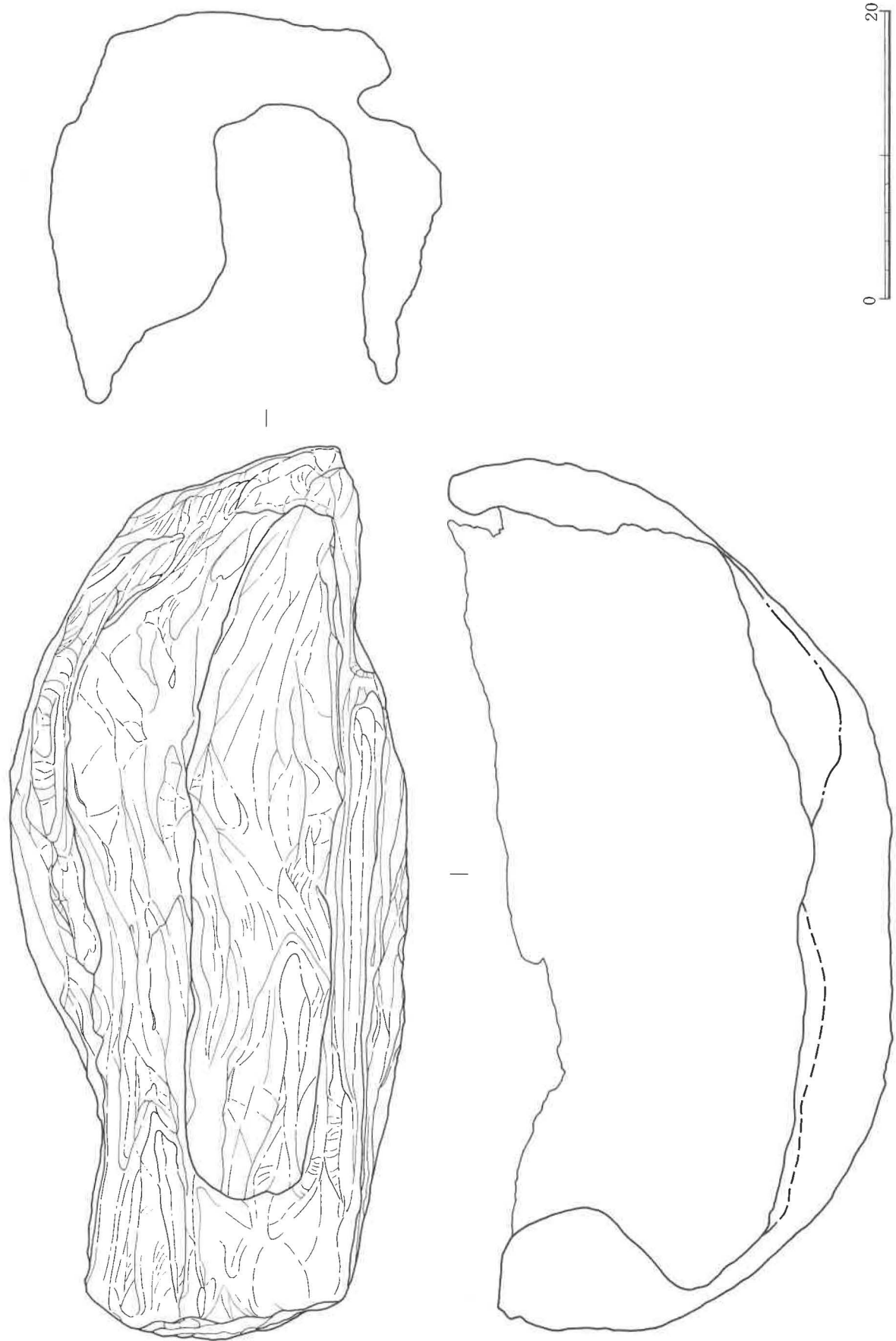


图6：木製容器上面・断面図

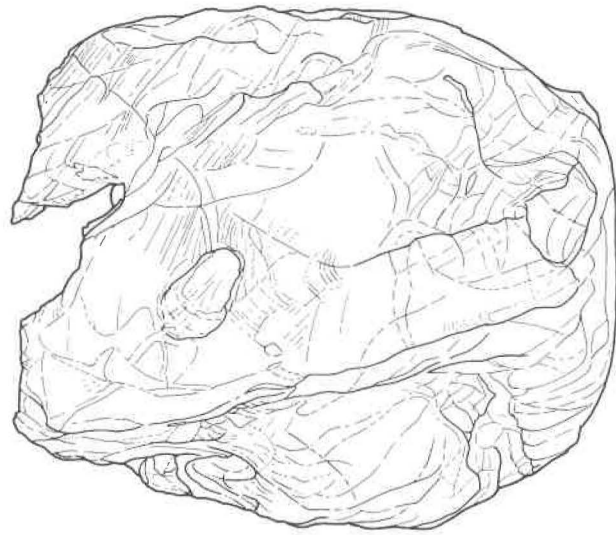


图 7：木製容器正面図・側面図



図版67：木製品（丸木杭・石斧の柄）

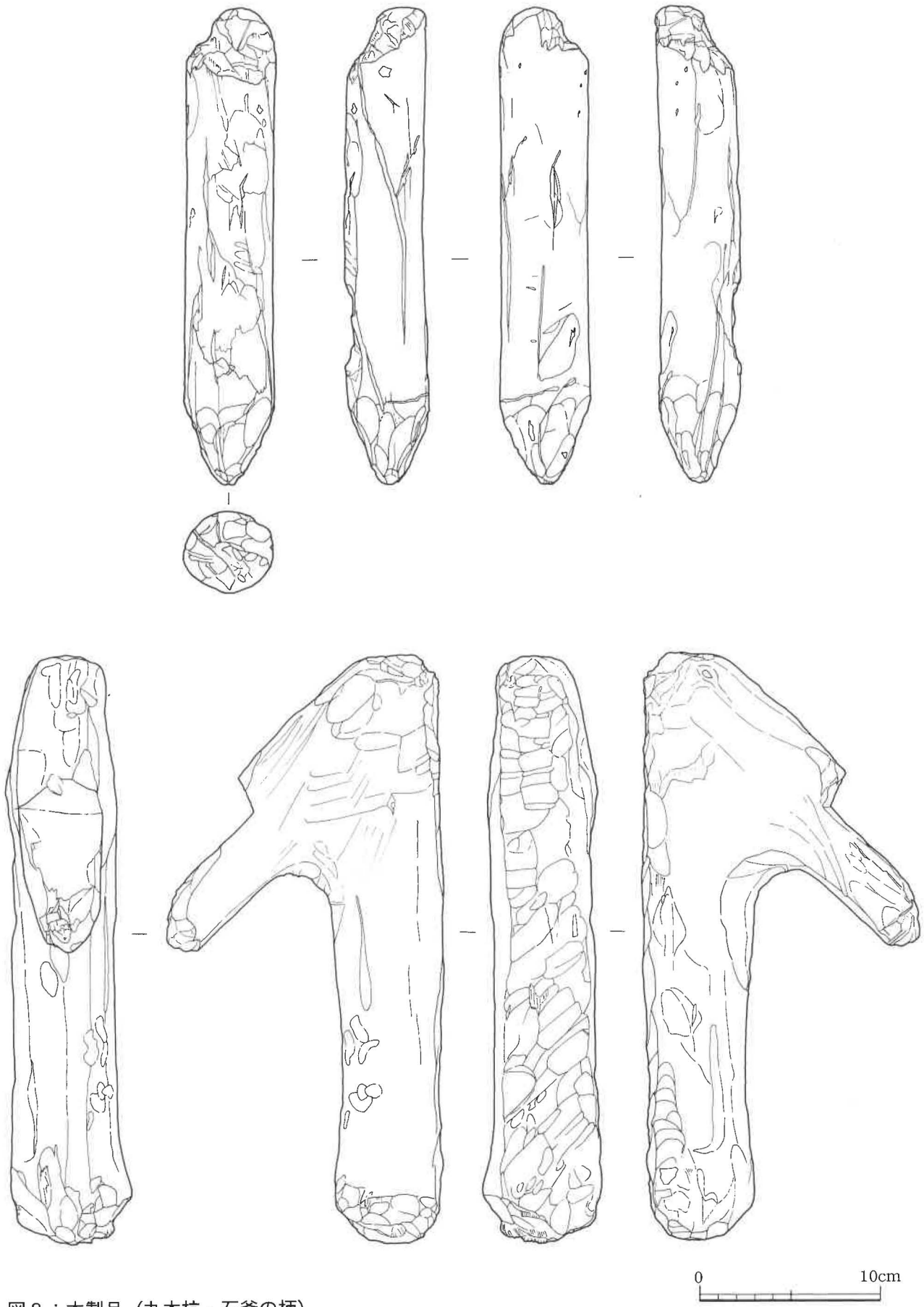


図 8 : 木製品 (丸木杭・石斧の柄)
 上 : 下端に加工痕有 下 : 未製品

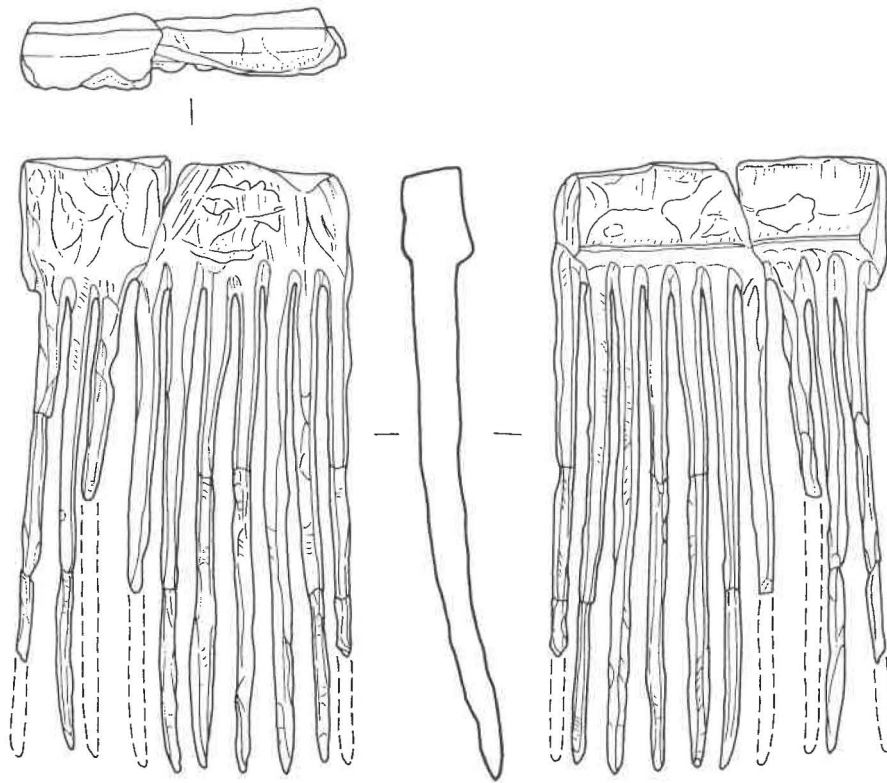


図9：木製品（櫛）（材質：ヤエヤマコクタン）

0 5cm



図版68：木製品（櫛）（材質：ヤエヤマコクタン）

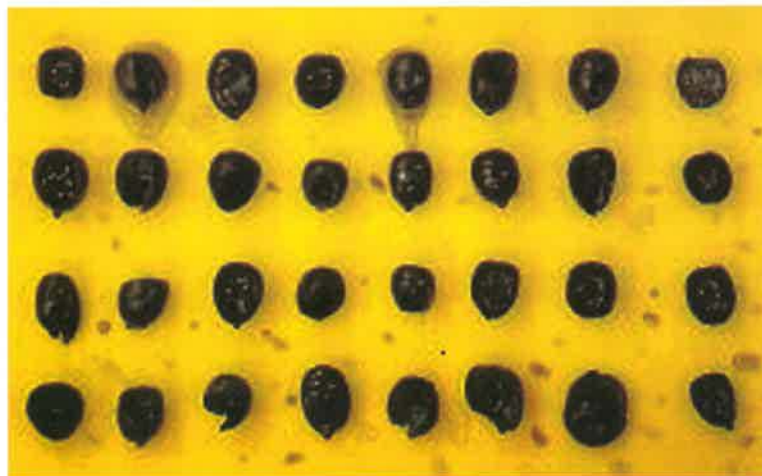


図版69：自然遺物

上：魚類 中：クジラ 下：サメ・エイ椎骨



図版70：自然遺物
 上：イノシシ骨 下：イヌー頭骨



図版71：ハイガイ（上） 糞石・琥珀（中） 炭化種子（下）

第四章 出土遺物

本遺跡からは土器・青磁・白磁・染付・石器・貝製品・骨製品・木製品などの人工遺物、貝類・骨類・木の実などの自然遺物が得られた。

その所属年代をみると縄文時代早期～近世にまたがり、沖縄の歴史を柱状に示したようである。

1、土器

a. 爪形文土器（図版33上左・図版37・38、図2上）

本遺跡の低湿地の曾畑式土器の下層から主に北側の丘陵部近くにまとまって出土した。最も古い土器である。爪形文土器はヤブチ式タイプと東原式タイプが出土している。前者は口縁部が直口もしくは微弱に外反し、胴部は直立し、胴部下より底部は丸く膨らむ。底部は丸底である。指頭押圧による細長めの爪形文を器面全体に施文する。器壁は薄い。後者は口縁部がわずかに外反する。爪形の施文は右側は深く左側にはねている逆D字状の文様となっている。器壁は前者に比較しやや厚めである。（東門）

b. 曾畑式土器（図版33下・図版39～45、図2下）

曾畑式土器は熊本県宇土市曾畑貝塚出土の土器を標式とするもので本遺跡で最も多く出土している土器である。土器全面に文様が施されるのが特徴である。文様は口唇に近くから底部に順次、第一文様、第二文様、第三文様、第四文様と区切られ、文様による分類が可能と思われる。

深鉢形が主体で小型と大型の2種がみられる。口縁部は平口縁と緩やかな山形口縁が見られ、直口口縁、外反口縁、内彎口縁がある。直口口縁は断面が丸味を帯び、文様は単沈線文など整然と施され、第一文様に短沈線文を施し、第二・三文様は横位か縦位の沈線文で整然としている。器色は主に黒褐色を呈する。外反口縁は断面が舌状を呈し、口唇部直下で外反するものが一般的である。第一文様に刺突文を施すものが多く、器色は黒褐色の他に赤～茶褐色を呈するものが見られる。胎土に白色粒を含むものが多い。

厚手ものは、文様も雑に施されている。器色は赤～褐色のものが多い。小型のタイプは直口口縁が確認されているが、その他に薄手で文様の浅いタイプも見られる。本報告では口縁の形、施文、器色、胎土など細かい分析で沖縄における曾畑式土器の変容の解明が期待される。

滑石が混入した曾畑式土器（図版33-右上）が1点出土しており、本品は薄手で文様は斜沈線文で、水摩を受けている。本品は九州から移入されたものであろう。（島袋）

c. 面縄前庭式土器（図版46）

本遺跡の低湿地及び砂丘地の丘陵部近くに分布する。口縁部は外反し、頸部が締まって胴部は張る。底部は尖底に近い丸底である。薄手のものと厚手が見られる。口縁部の直下と頸部に横位に凸帯を貼り付けるものと、頸部の凸帯を波状に貼り付けるものがある。その上下の凸帯間に波状文もしくは縦位の沈線を施文している。凸帯は刺突文を連続して施し、頸部下より胴部下まで縦位の沈線文を施文している。面縄前庭式ⅢからⅤ式のタイプが見られる。（東門）

d. 仲泊式土器 (図版47)

本遺跡出土の仲泊式土器は器形が深鉢形で、口縁部は平口縁と山形口縁の二種類あり、両方とも肥厚している。頸部は締まり、胴部が張る。底部は尖底である。文様により次の二種類に分けられる。口縁部の肥厚帯に貝殻の端部を押しつけて施文するもの(仲泊A式)と篋状工具による斜沈線または羽状文を施文するもの(仲泊B式)である。

面縄前庭式土器の要素と仲泊式土器の要素を持ち合わせた土器が出土している。口縁部は三角形に肥厚し、口唇部は平坦で、沈線を連続して施文している。頸部は窄まり斜沈線もしくは羽状文を施している。
(東門)

e. 面縄東洞式土器 (図版48~49) ・伊波式土器 (図版49) ・型式不明 (図版49)

縄文時代後期の土器は面縄東洞式土器・伊波式土器・不明土器等がある。いずれも残りが悪く小破片が多い。

まず、面縄東洞式土器に分類されるものを図版に示した。器種は深鉢形である。

口唇部が残っているものが6点、そのうち有文のものは2点である。形状は舌状で外反しているもの・肥厚帯が平らな薄いものが多い。

文様についてみると、施文範囲は、口唇部外面とその直下口縁部の裏面が対象である。文様の種類は押し引き文(a)・刺突列点文(b)・無文(c)の3種類に分類される。文様構成は曲線文が組み合わされるもの(I類)・横位文が一部で垂直になるもの(II類)・横位文が一部で段を有するステップ文が組み合わされるもの(III類)・横位文のみの施文(IV類)の4種類に分類される。施文具は先端の尖ったヘラ状工具が多く、押し引き手法が圧倒的である。

次に、伊波式土器に分類されるものを図版49に示した。器種は深鉢形である。

口縁部の形状は平口縁で外反しているものと、低平な山形突起の波状口縁のものがある。前者は口縁にそって短沈線文を三条施しており、後者は口唇部に刻目文を施し口頸部に刺突文らしき痕がみられる。胴部資料は全体的に擦痕が残り一条の押し引き文の下に鋸歯文を施す。施文具は先端が角を持つ単ヘラ状工具と又状工具を用いている。

上記のどちらにも含まれない資料を型式不明とした。図版49番3段目の右は胴部資料である。縦位に凸帯上に先端が角を持つ単ヘラ状工具で刺突文が施され、凸帯の左右には羽状文が施されている。小破片の為、全体の文様構成は不明であるが、嘉徳Ⅱ式土器に後続する面縄西洞式土器に類似している。しかし、胎土は縄文後期土器の要素がみられる。図版49番3段目の中は口縁部資料である。口唇部は舌状で横捺文を施し、口縁部にも三条の横捺文を施す。

底部については、底面から弱くくびれ胴部に立ち上がる資料(図版49番4段目の右)は面縄東洞式土器の範疇である。平底から胴部にゆるやかに立ち上がる資料(図版49番4段目の中)は伊波式土器の範疇に含まれる。

器面調整は、面縄東洞式土器はナデ調整が多いが裏面に条痕を残すものもある。伊波式土器は擦痕とナデ調整がみられる。図版49番2段目の右は横位の擦痕を施す。

胎土・器色・混入物は、面縄東洞式土器は砂質のものが多く、石英の細粒と粗粒を多く含み黒褐色・赤褐色を呈すものが多い。伊波式土器は砂質で石英・チャート・貝・雲母を含むが細粒を多く含み淡明褐色・灰褐色を呈している。図版48番4段目の右は砂質で混入物は極細粒の石英を多く含み黒褐色を呈している。図版49番4段目の中は砂質で石英・チャート・貝を含み赤褐色で芯は黒褐

色を呈すサンドイッチ状である。

(尾木)

d. 晩期系土器 (図版35上、50・51、図4下)

唯一復元できた資料は口径31.0cm、高さ18.5cm、底径5.3cmのやや浅い鉢形である。口縁部近くは丸みを帯び肩部で逆「く」の字形に屈曲するもので器厚が6mm前後のものと8mm前後のものがあり、外面は丁寧に器面調整が施されている。胎土に黒色の鉱物を混入するものが多いが、内面は焼成後混入物が抜け、アバタを呈するものもみられる。

胴上部に耳を付ける外耳土器も出土する (図版51)。外耳は平面が横位に付けるものと弧状に付けるものがある。これらは胴部がやや張るような形を呈している。

e. 浜屋原式土器 (図版52)

口縁部に稜をもつ直口の鉢形の土器である。出土量はさほど多くない。一括で出土した資料には口縁部近くに炭の付着が見られる。胎土は砂質である。

f. 後期系土器 (図版35下、53・54・55、図4下)

ほぼ完形で出土した資料である。口径32cm、高さ22.4cm、底径7.3cmを測る。口縁部と底部に帯状に炭が付着し、胴部の部分に炭の付着がみられない。

g. グスク系土器 (図版36下、図版55、図5下)

グスク系土器は出土量は少ない。口縁部が外反し、外面には斜位、内面には横位の擦痕を施したものである。口径28cmで高さが14.5cmを測る。

h. グスク時代以降の遺物 (図版56・57)

今回、少なくとも14～19世紀の遺物が確認できた。青磁、白磁、染付、褐釉陶器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器の7種19点と、寛永通宝1点について概略を述べる。

図版56上段左は青磁碗の口縁部である。上段左から二つ目は青磁菊皿の口縁部で14世紀頃のものである。上段右は青磁碗の底部で見込みに印花文がある。復元底径は5.4cmである。類例は今帰仁城跡にみられる。

上段右から二つ目は白磁小碗の底部で型押し成型によるものである。徳化窯のものと思われる。18世紀～19世紀のものである。

中段左は染付の口縁部で、中段左から二つ目は染付の胴部である。

中段右から一つ目は褐釉陶器壺の底部で、上げ底になるものと思われる。内外面に施釉されている。

下段左は染付碗の口縁部で、下段右は染付碗の胴部である。下段中は本土産陶磁器の皿で一見青磁のような釉色である。

図版57上段左と中央は灰釉碗の口縁部と底部で、高台から口縁部にかけて直線に立ち上がるタイプのものである。底部の復元底径は8.0cmである。17世紀後半～18世紀前半のものである。上段右は急須の胴部である。中段左は火取の口縁部である。中段中央は白磁瓶の底部である。復元底径は7.2cmである。

中段右は陶質土器鍋の底部である。類例は御細工所跡にみられる。下段左は火炉の口縁部で、その隣は急須の胴部である。下段右から二つ目は陶器壺の胴部である。

下段右は寛永通寶である。直径2.15cmで、重量は2.13gである。背面に「文」字を持たないこと、字のくずれ方などから1697（元禄10）～1781（天明元年）年に鑄造された三期のものと思われる。（細川）

2. 石器（図版58～62）

石器は曾畑式土器に伴って最も多く出土しているが、縄文時代早期～グスク時代にまたがって出土している。器種は、石鏃・石斧・円形石器・凹石・磨石・クガニ石様石器・たたき石・石皿等があり、これらの材質は輝緑岩・角閃岩・安山岩・ひん岩・玄武岩・頁岩などの火成岩や細粒や片状砂岩・礫質砂岩・千枚岩・緑色片岩・泥質片岩などの堆積岩、チャート・黒曜石などが用いられている。

本遺跡の特徴としては本部半島で以北の地域で産出するチャートが現在報告されている中では最も多いことである。総重量は約2500g（約3400個）で、その大きさは最小0.5g～最大560g（図版62－下）を測る。これ以外に重さ4kgを測る石英（図版62－下右）も出土しており、チャートと同じように用いられていたようである。曾畑式土器に伴ってチャート製の石匙が沖縄で初めて検出されている。（図版62－中）

石斧はバラエティに富み、爪形文土器や曾畑式土器と伴う扁平打製石斧（図版58）・局部磨製石斧・バチ形石斧（図版59－上）や弥生時代の特徴的な石器である柱状片刃石斧（図版60－上）なども出土している。石鏃は打製（図版62－中）と磨製（図版60－上右）がみられ、前者が曾畑式土器に伴い、後者は後期土器に伴って出土している。また、楕円形を呈したクガニ石様石器は雲母安山岩製で重さ7.5kgを測り、石器の中で最も重い。その他に石皿（図版61－上）も出土した。（島袋）

3. 骨製品（図版64・65）

イノシシ下顎犬歯やサメ歯を利用した垂飾品やイノシシの腓骨や脛骨などの四肢骨やジュゴンの肋骨・鹿の角（図版64－上右）を用いた刺突具、クジラやジュゴンの骨を利用した骨の未製品（図版65）も多く出土している。その中で当時の沖縄諸島では棲息していない鹿角の製品は貝塚時代後期にアカジャンガー貝塚で出土しているが、古い時期には初めてである。

クジラの骨を多く利用するのは古我地原貝塚と酷似しているようである。（島袋）

4. 貝製品（図版63）

本遺跡の貝製品は総数40数点出土し、そのうち15点を掲載した。実用品と装飾品に大別でき、装飾品はツノガイ製品、貝製小玉、ノシガイ有孔製品、タカラガイ製品、二枚貝有孔製品、サラサバテイラ製品の計14点で、実用品は螺蓋製貝斧1点のみである。

ツノガイ製品は、貝の先端部を利用し、殻表や上下面を研磨加工したもので、精製品と粗製品がある。内側の空洞を利用して紐を通し、首飾りなどに用いたと想定される。県内での出土例は少なく、古我地原貝塚で1点出土している。また、鹿児島県種子島の馬毛島埋葬址より出土例がある。

貝製小玉は、小形のイモガイとマガキガイを利用したのものがあり、イモガイ製が1点、マガキガイ製が3点出土した。すべて螺塔部を利用したもので、殻表面がアバタ状を呈することから死貝を用いたものと想定される。

ノシガイ製品は、背面を穿孔し、研磨を施したもので、古我地原貝塚や津堅キガ浜貝塚などで類例がある。タカラガイ製品はハナマルユキを用い、背面を除去して一部研磨を施したものである、背面の加工が粗く、民俗事例に背面を粗加工した貝錘としての使用例がある。

二枚貝有孔製品はチョウセンハマグリを用いたもので、腹縁を剥離させている。平敷屋トウバル遺跡などで類例が報告されている。サラサバテイラ製品は殻の底面を研磨利用したもので、摩耗が激しく、殻表面が剥がれ、内面の光沢が露出している。久米島大原貝塚で類似品が貝輪として報告されている。

実用品はヤコウガイの蓋を用いた、所謂「螺蓋製貝斧」が1点のみ出土した。本品は蓋の最も薄い部分を打割によって剥離加工したもので、作成された刃部は、幅が5.1 cm、縦が1.5 cmと使用部位を限定する加工となっている。

以上、伊礼原遺跡の貝製品を概観した。本遺跡では貝製品の出土は僅かであり、バラエティーに乏しく、そのほとんどが装飾品である。特徴的なのは県内では出土例の少ないツノガイ製品が最も多く出土したことである。

(仲村)

5. 木製品 (図版66～68・図6～9)

木製品は縄文時代前期・中期・後期から出土している。量的には前期が多い。前期の資料は県内では最も古いものである。竹を素材とした約90cm四方の隅丸方形の筥、その近くで出土したクチナシを素材とした石斧の柄 (図版67下)、タブノキを素材とした有孔製品、素材が不明である角材、杭などがある。中期はショウナンボクという素材で大型の容器 (図版66) (縦27cm・横63cm・高さ32cm) がある。カーボン測定では 4460 ± 30 である。この素材は日本には生育しておらず、台湾か中国の本土に生育しているものである。この時期の台湾及び中国との交流は未確認であることからその存在についてどう解釈するか課題が残る。後期はヤエヤマコクタンを素材とした櫛 (図版68) (厚さ約1 cm・幅4.4 cm・縦約8 cm・櫛歯の長さ約6 cm) が出土。刻歯式という技法で精巧に作られている。カーボン測定では 2580 ± 40 である。

(東門)

6. 自然遺物 (図版69～71)

魚類、ハブ類、海獣類、貝類などが出土している。

魚類は岩礁に棲息するエイ・サメ類・ベラ類・ブダイ科、ベラ科などがみられ、魚の骨は大きい方である。海獣類はウミガメ、クジラ、イルカ、ジュゴン、獣類はイノシシ類でその出土は野国貝塚のように多く出土した。

貝類は現在絶滅種とされるハイガイ (図版71上) が多数得られ、その他にシレナシジミやウミニナ類などマングローブに棲息する貝などやシャコガイ・マガキガイ・チョウセンサザエなどの潮間帯に棲息する貝なども出土している。

(島袋)

〈参考文献〉

- 沖縄県教育庁文化課『古我地原貝塚』沖縄県教育委員会 1987年
- 西之表市教育委員会『馬毛島埋葬址鹿兒島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡』 1980年
- 沖縄県教育委員会『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会 1978年
- 沖縄県教育委員会『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育庁文化課 1997年
- 沖縄県教育庁文化課『大原一久米島大原貝塚群発掘調査報告一』沖縄県教育委員会 1980年
- 金武正紀・宮城利旭・比嘉春美「宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚 発掘調査報告」『具志川市文化財調査報告書』
第4集 具志川市教育委員会 1980年
- 東門研治「キャンプ桑江内試掘調査のNo.143について」『南島考古だより』第59号 沖縄考古学会 1998年
- 金武正紀・比嘉春美・島 弘「御細工所跡一城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告一」『那覇市文化財調査報告書』第18集 那覇市教育委員会 1991年
- 東門研治〈速報〉伊礼原C遺跡『考古学ジャーナル』No.454 2000年

沖縄本島伊礼原C遺跡から出土した縄文時代前期の木製品および自然木の樹種とそれ
から類推される海上輸送

能城修一（森林総合研究所木材特性研究領域）

沖縄島北谷町の伊礼原C遺跡から発掘された縄文時代前期の木製品や加工木、および自然木の樹種を同定した。計87点中には27分類群が見いだされた。木製品ではタブノキ属およびセンダンの板目板が比較的多く見いだされた。自然木にはマングローブの主要構成要素となる樹種は見いだされなかった。幹材としてはスダジイや、イヌビワ近似種、ニシキギ属、オオハマボウ、シマトネリコ、チシャノキ類が多く、これにタブノキ属や、モチノキ属、サキシマスホウノキ、サガリバナ、シマトネリコの根材や根株材が伴っていた。自然木の樹種から考えると、当遺跡周辺には海岸林あるいはマングローブの後背林と台地下部の森林とが広がっていたと想定された。自然木の樹種はすべて沖縄本島に自生していたものと思われるが、木製品あるいは加工木には現在の琉球諸島には生育しない針葉樹3分類群、すなわちコウヨウザン属、ヒノキ、ショウナンボクが認められた。これらが現在ともに生育しているのは台湾であり、コウヨウザン属とショウナンボクは中国にも生育している。海流あるいは人類による輸送によって台湾から沖縄本島にもたらされた可能性について考察した。

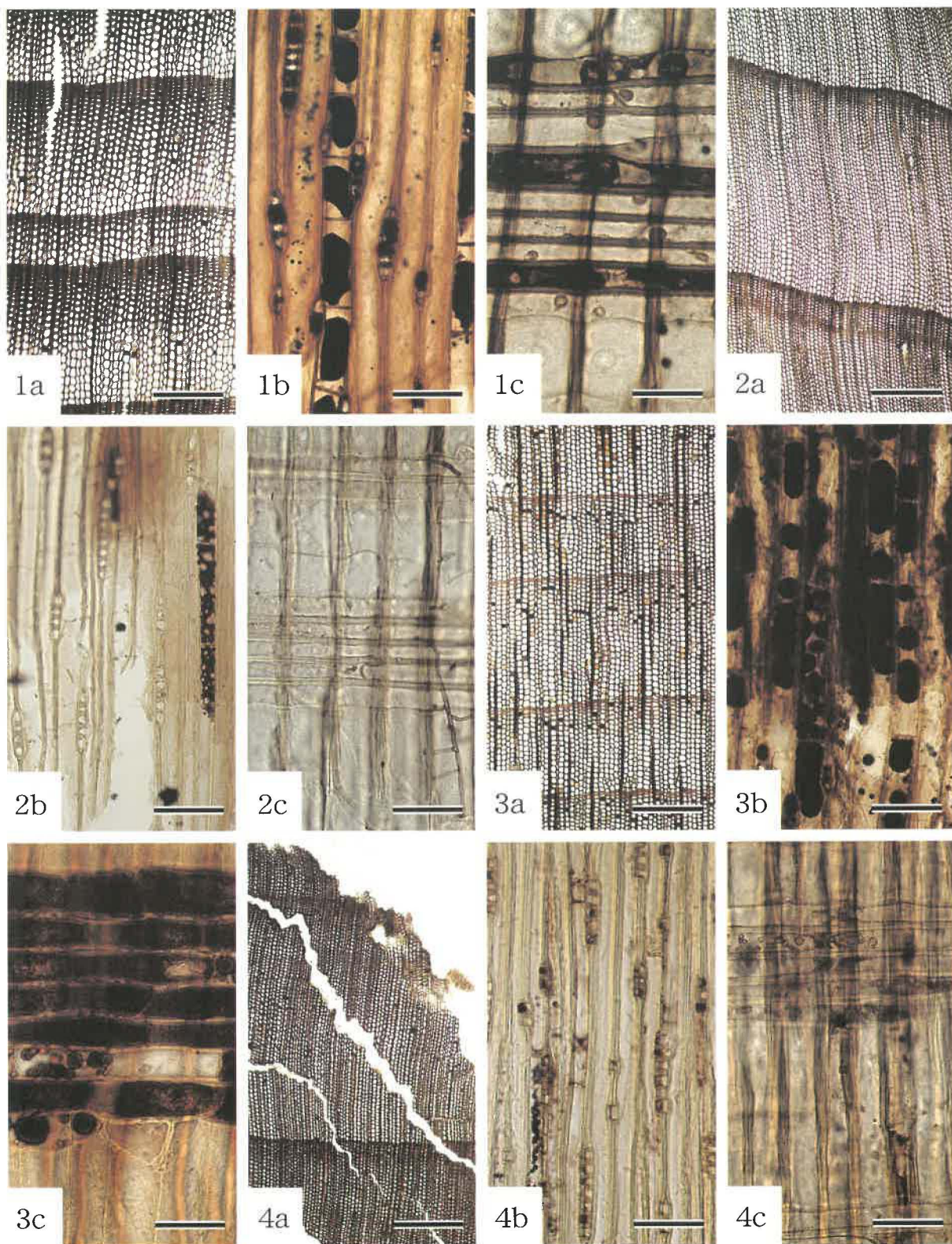


図1. 伊礼原C 遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c: コウヨウザン属 枝・幹材 (OKI-120, 121), 2a-2c: タイワンヒノキ 枝・幹材 (OKI-166), 3a-3c: ショウナンボク 枝・幹材 (OKI-143, 142), 4a-4c: マキ属 枝・幹材 (OKI-172). a: 横断面 (スケール= 500 μ m), b: 接線断面 (スケール= 100 μ m), c: 放射断面 (スケール= 50 μ m).

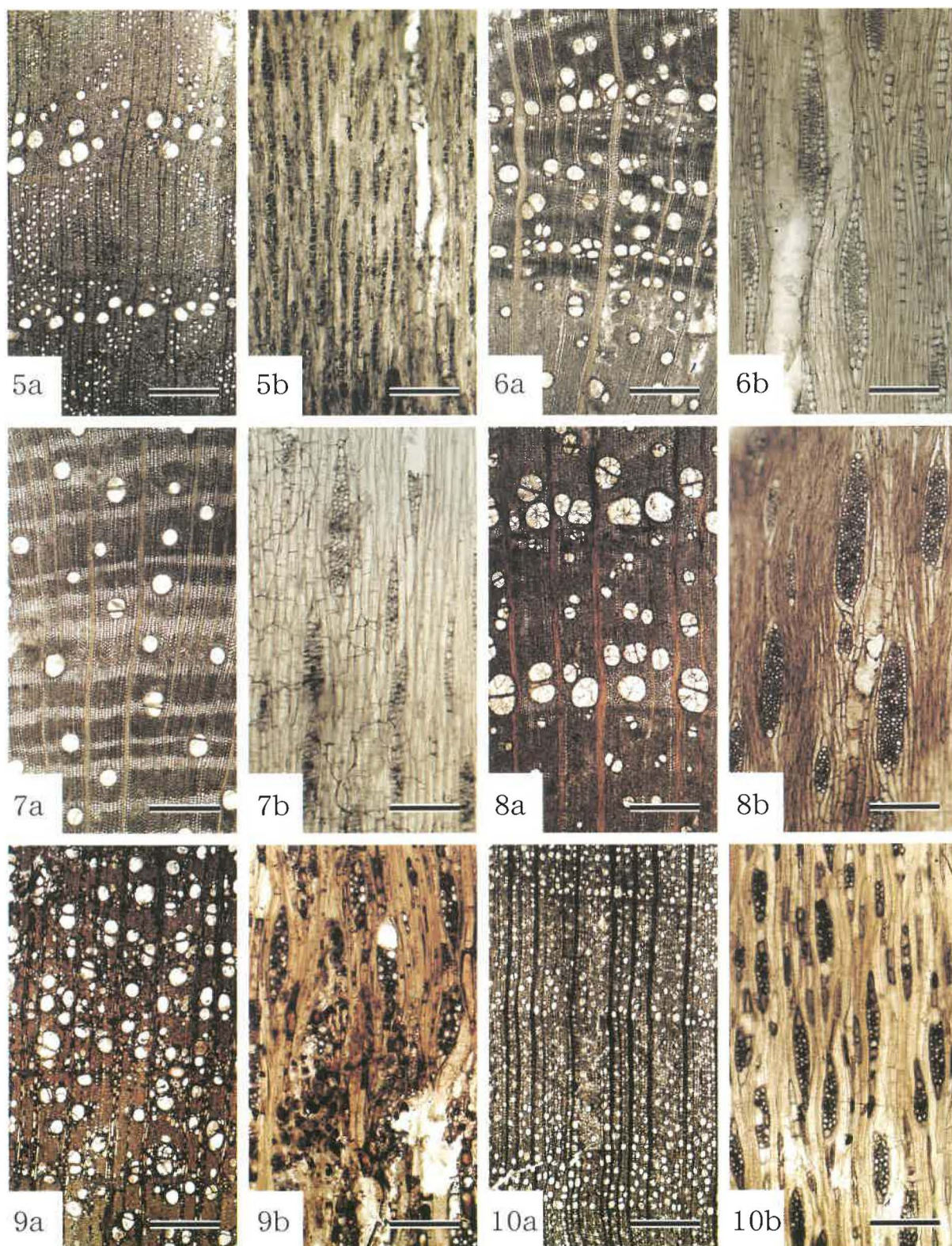


図2. 伊礼原C 遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)

5a-5b: オキナワジイ 枝・幹材 (OKI-161), 6a-6b: エノキ属 枝・幹材 (OKI-134), 7a-7b: イヌビワ類 枝・幹材 (OKI-136), 8a-8b: クワ属 枝・幹材 (OKI-174), 9a-9b: タブノキ属 枝・幹材 (OKI-101), 10a-10b: ツバキ属 枝・幹材 (OKI-106). a: 横断面 (スケール= 500 μ m), b: 接線断面 (スケール= 200 μ m).

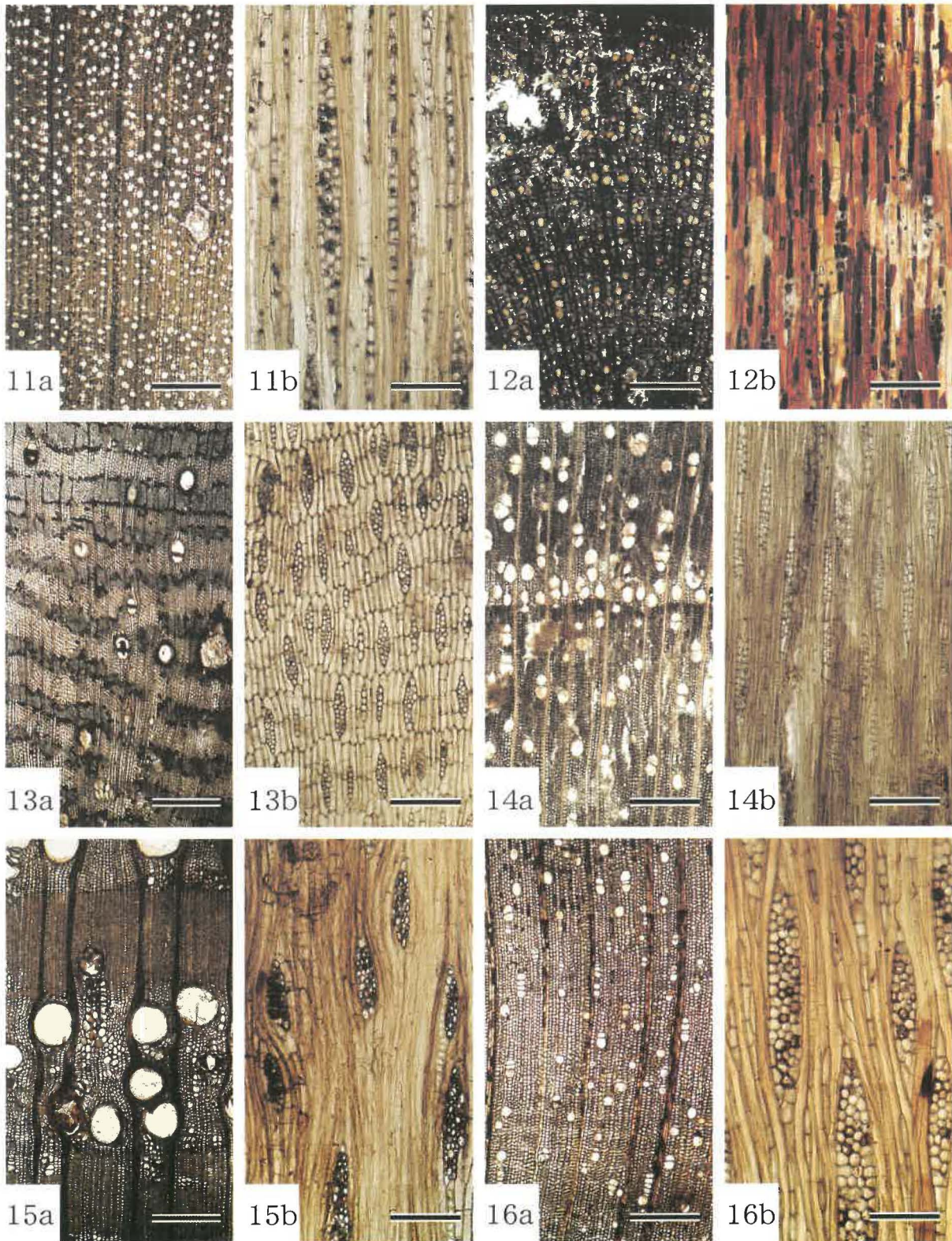


図3. 伊礼原C 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (3)

11a-11b: モッコク 枝・幹材 (OKI-125), 12a-12b: イスノキ 枝・幹材 (OKI-163), 13a-13b: クロヨナ 枝・幹材 (OKI-149), 14a-14b: サンショウ属 枝・幹材 (OKI-140), 15a-15b: センダン 枝・幹材 (OKI-154), 16a-16b: モチノキ属 根材 (OKI-185). a: 横断面 (スケール= 500 μ m), b: 接線断面 (スケール= 200 μ m).

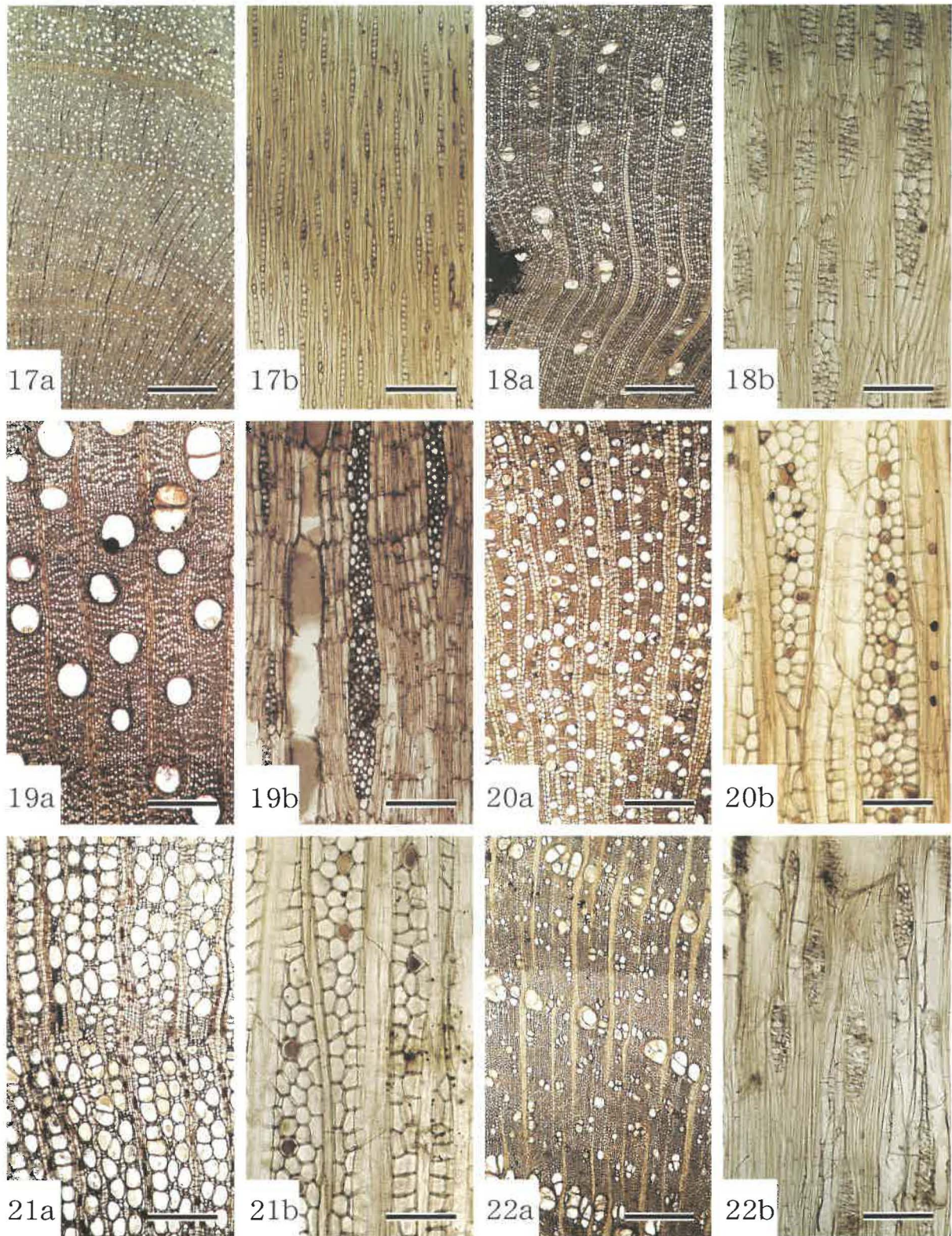


図4. 伊礼原C 遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)

17a-17b: ニシキギ属 枝・幹材 (OKI-111), 18a-18b: オオハマボウ 枝・幹材 (OKI-135), 19a-19b: サキシマスオウノキ 根材 (OKI-151), 20a-20b: サガリバナ 枝・幹材 (OKI-138), 21a-21b: サガリバナ 根材 (OKI-133), 22a-22b: ハリギリ 枝・幹材 (OKI-112). a: 横断面 (スケール=500 μ m), b: 接線断面 (スケール=200 μ m).

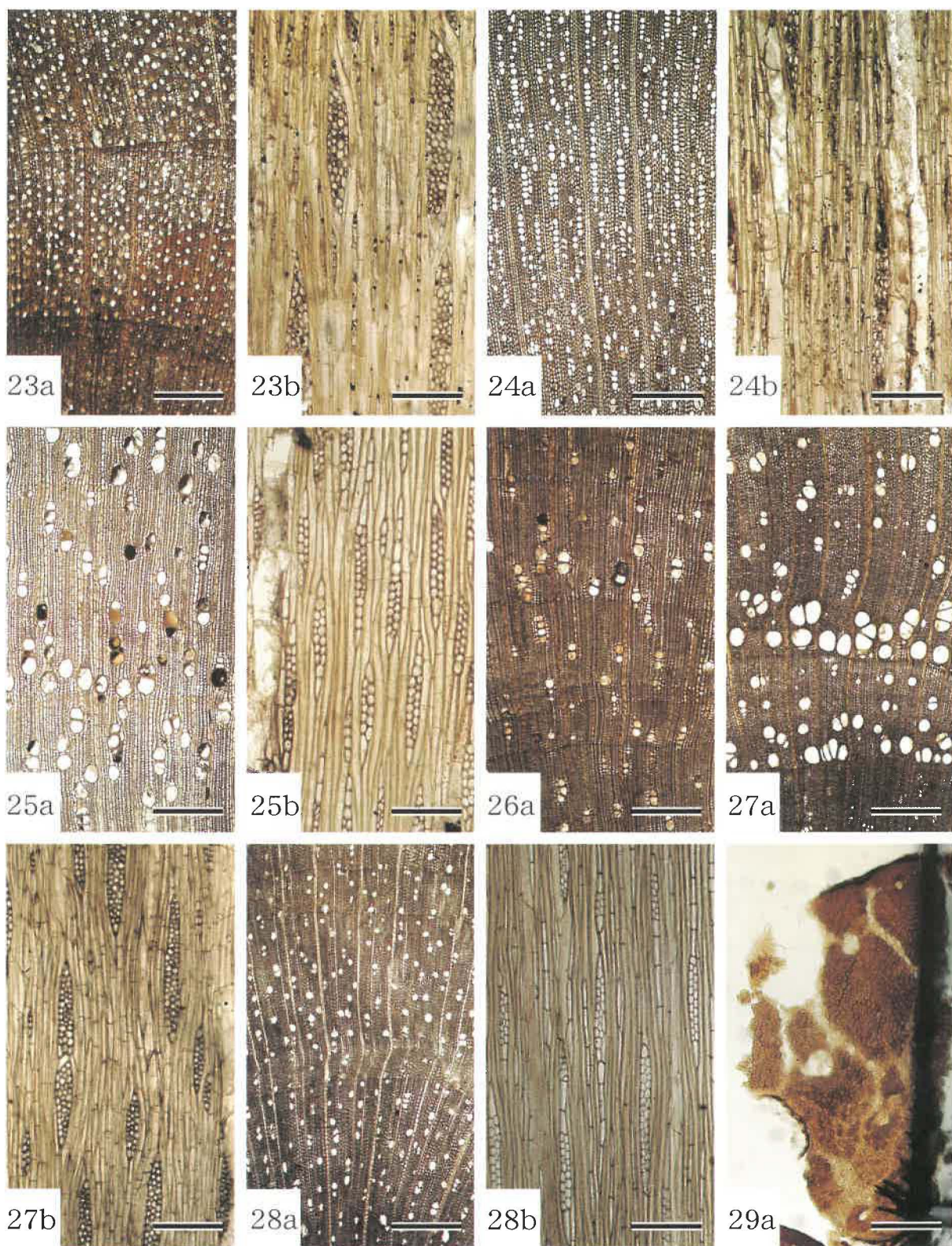


図5. 伊礼原C 遺跡出土木材の顕微鏡写真 (5)

23a-23b: ギーマ 枝・幹材 (OKI-137), 24a-24b: イズセンリョウ属 枝・幹材 (OKI-118), 25a-25b: シマトネリコ 枝・幹材 (OKI-181), 26a: シマトネリコ 根材 (OKI-177), 27a-27b: チシャノキ類 枝・幹材 (OKI-132), 28a-28b: ムラサキシキブ属 枝・幹材 (OKI-122), 29a: タケ亜科 (OKI-107). a: 横断面 (スケール= 500 μ m), b: 接線断面 (スケール= 200 μ m).

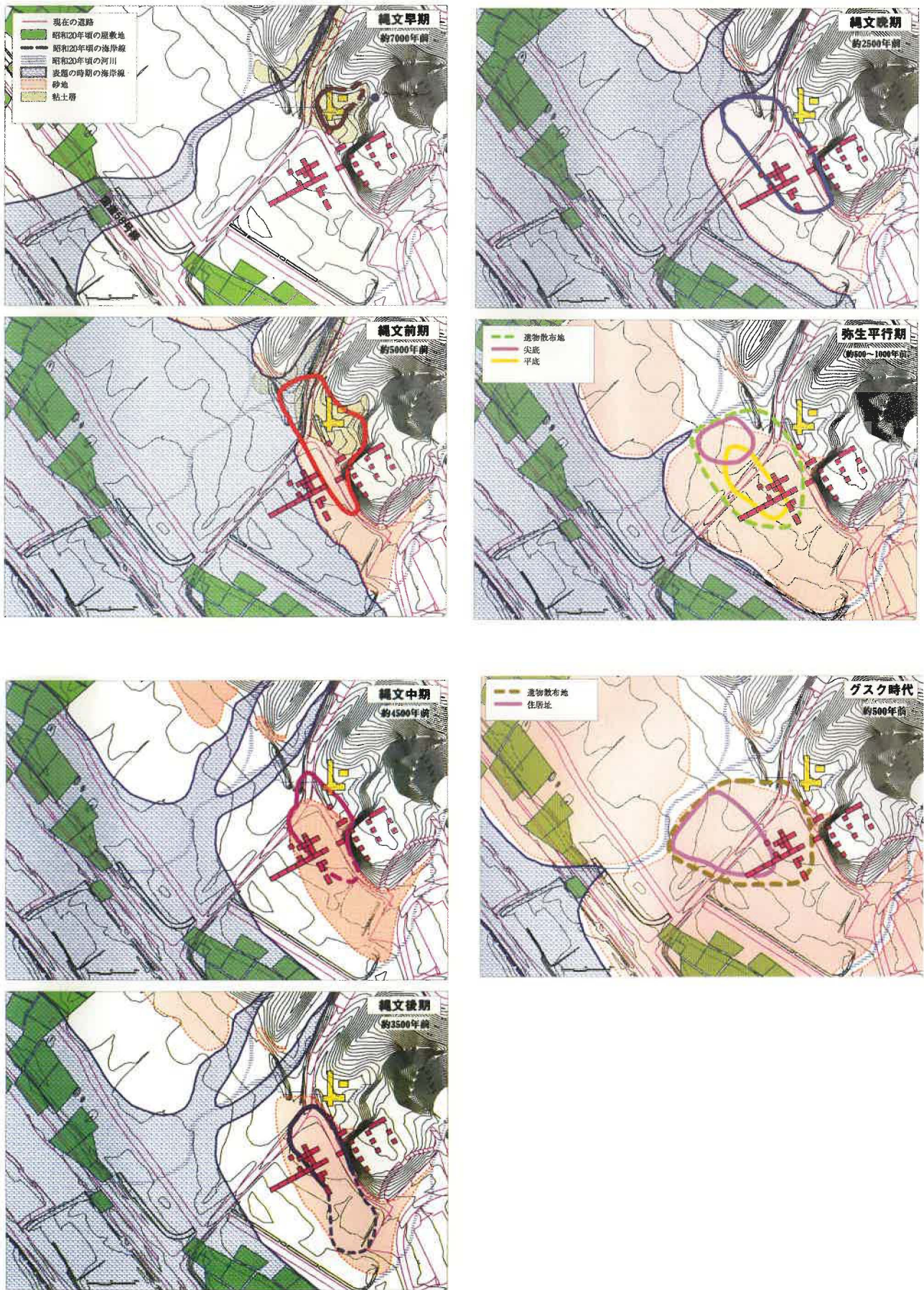
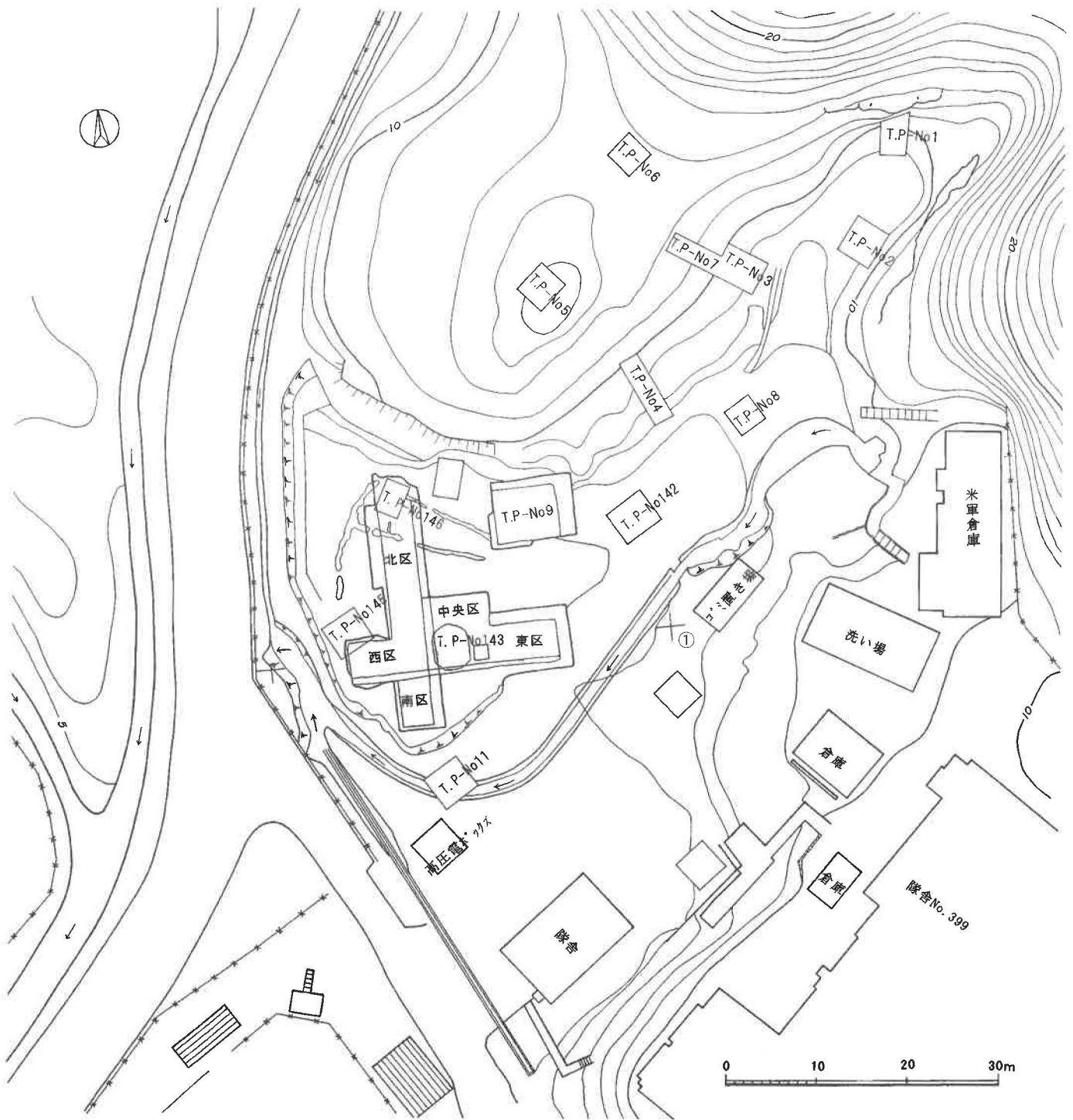


図10：伊礼原遺跡の各時期の海岸の変遷



①の座標 X=35553.7496 Y=26036.7427 Z=6.580

図11：伊礼原遺跡（低湿地）地形図

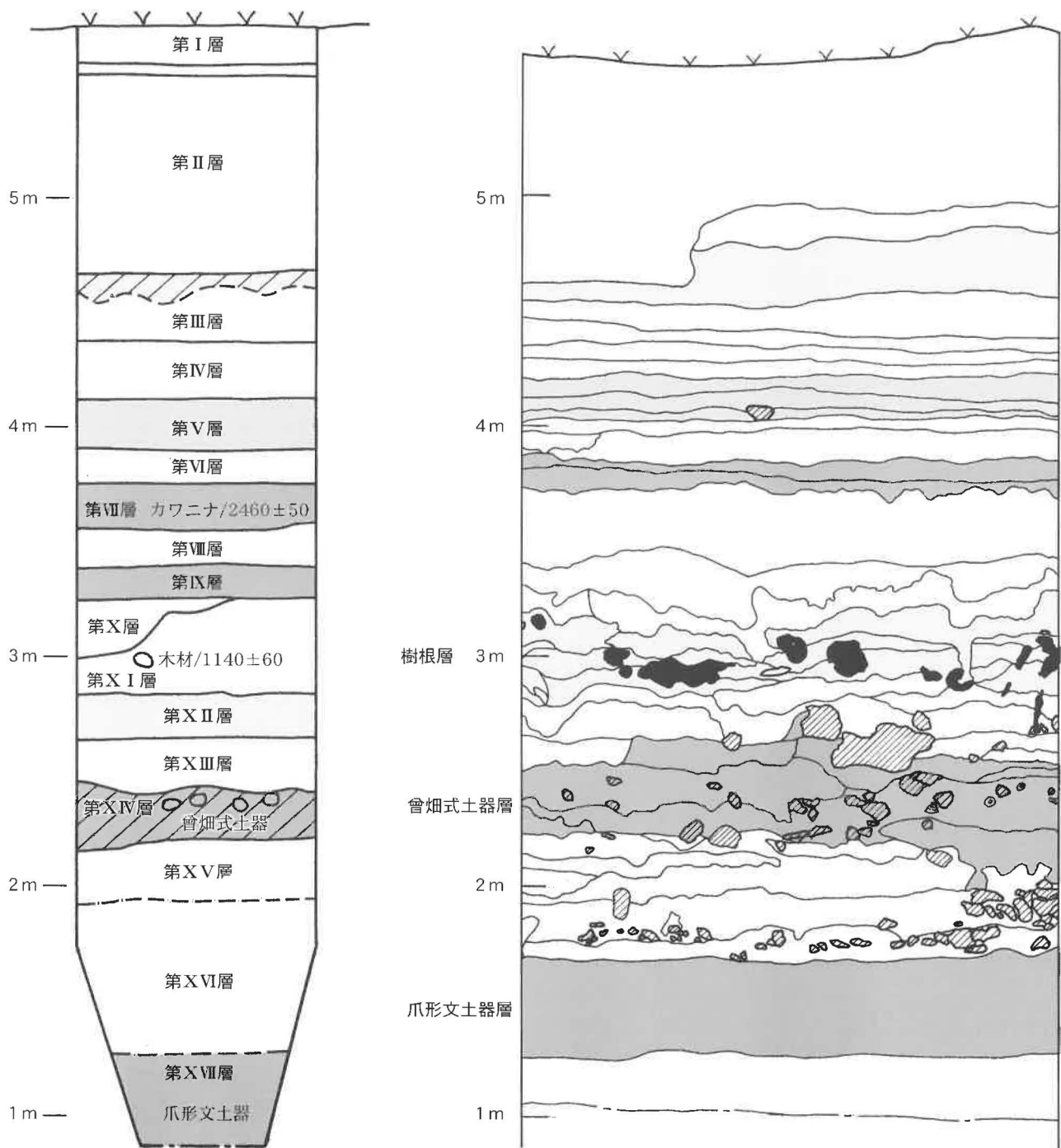


図12：伊礼原遺跡（低湿地）の基本層序

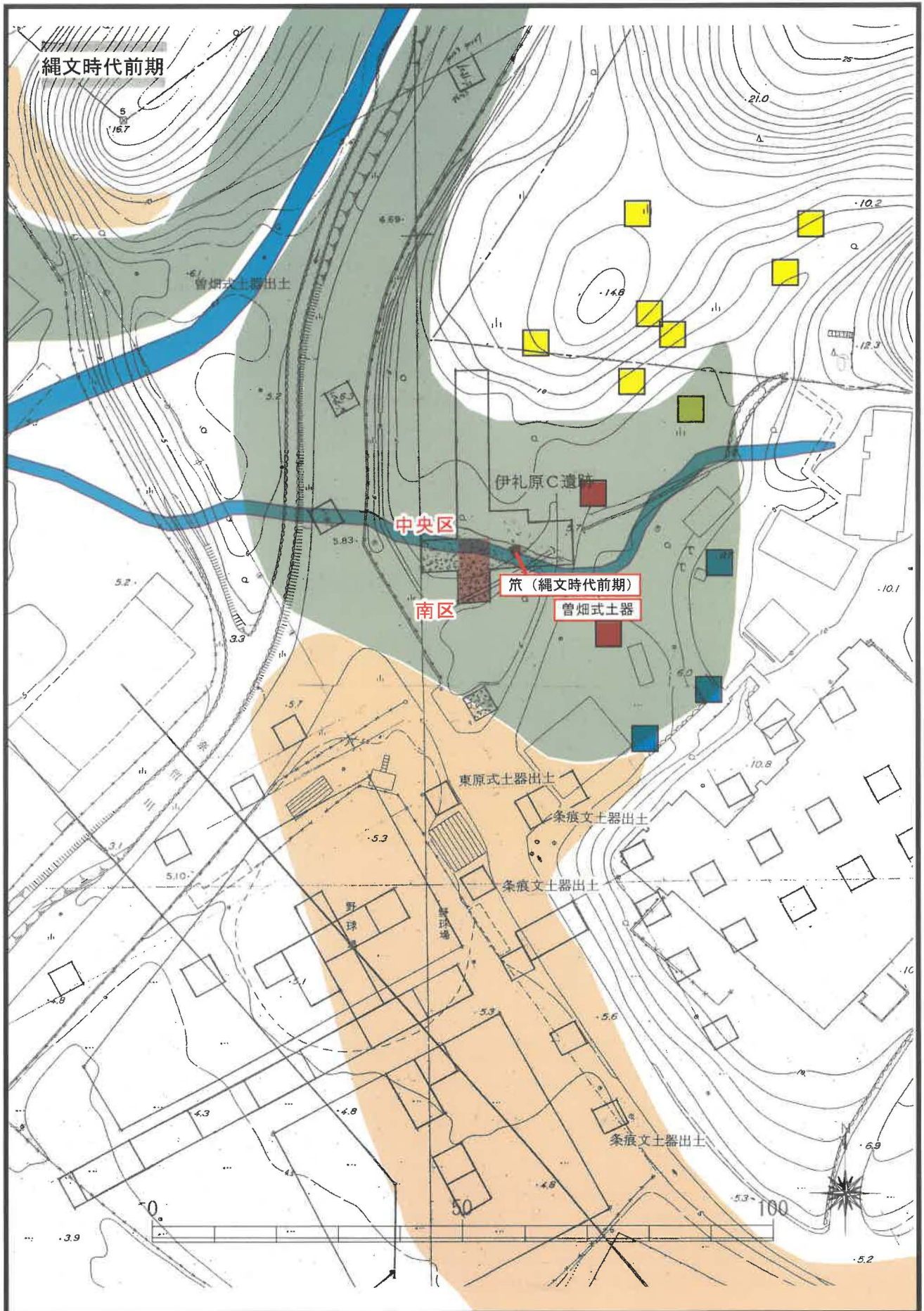


図14：縄文時代前期の様相

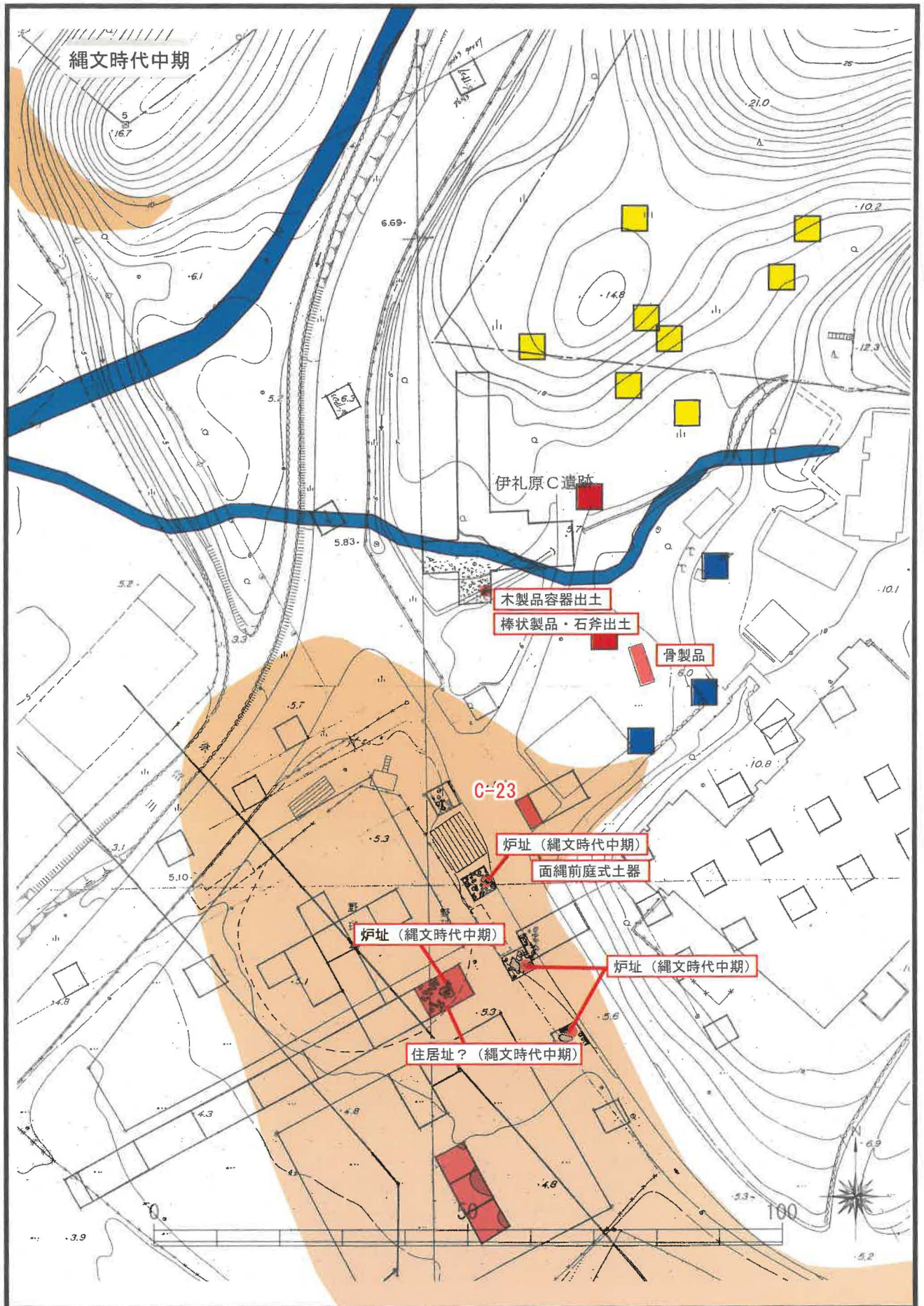


図15：縄文時代中期の様相

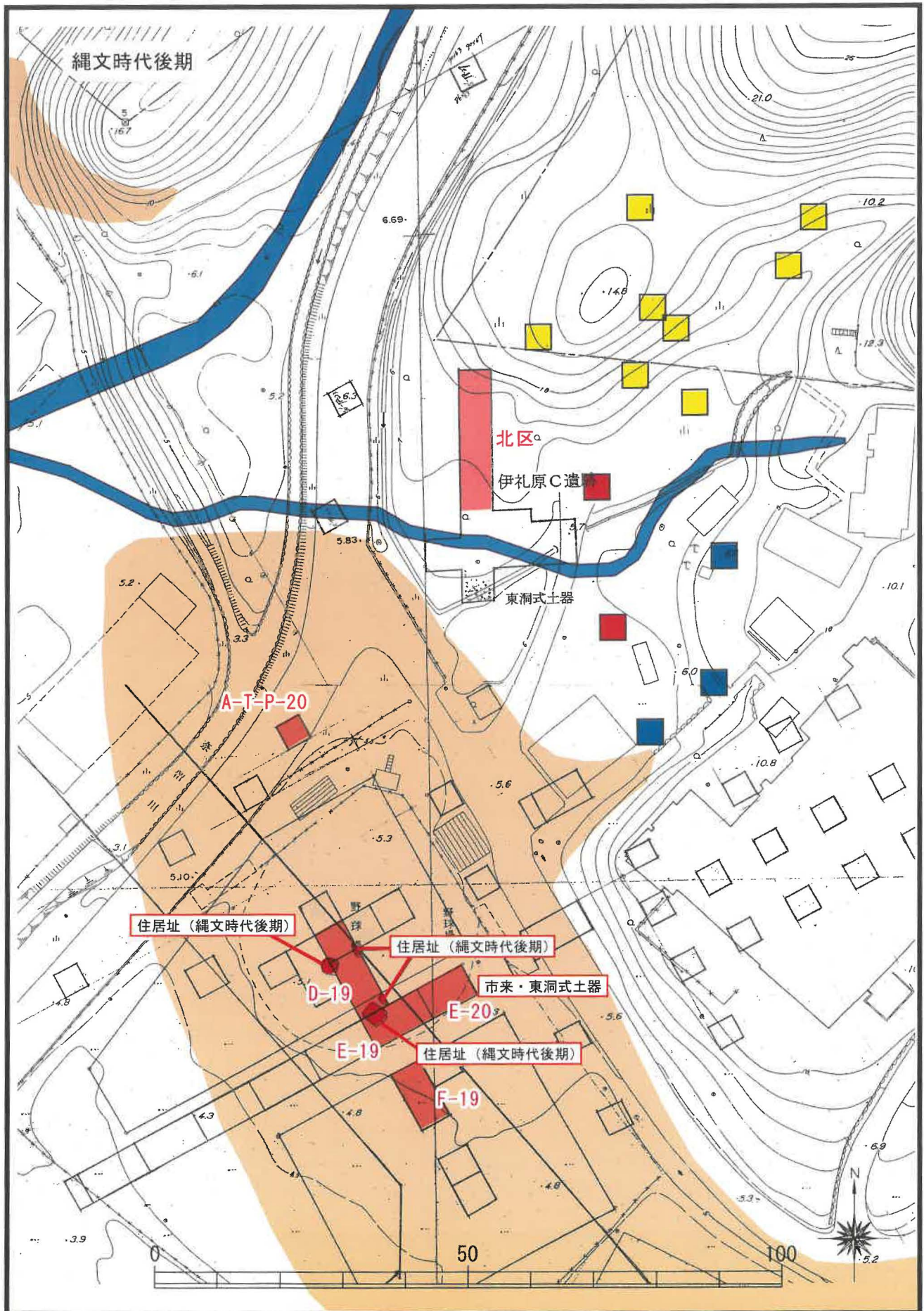


図16：縄文時代後期の様相

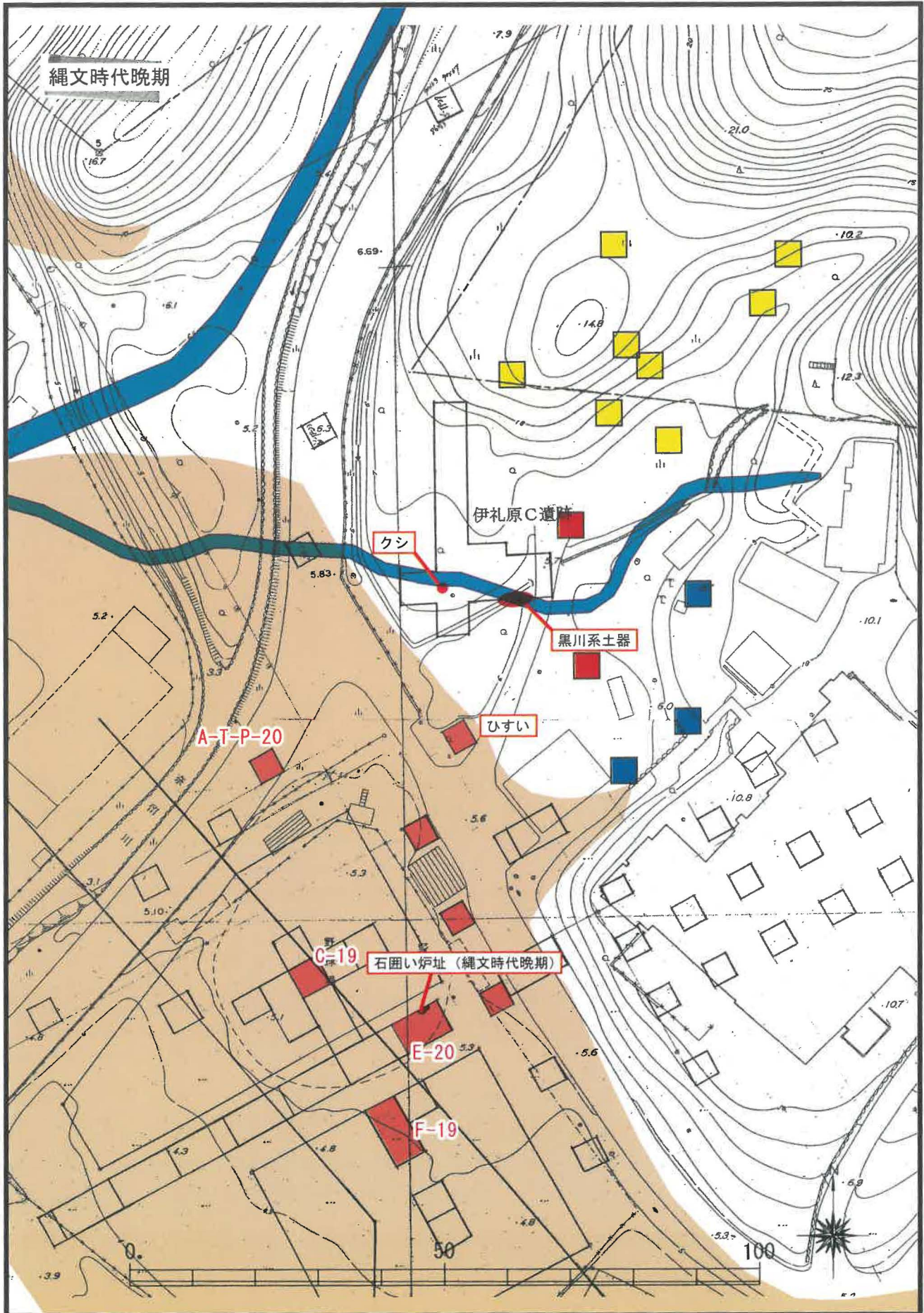


図17：縄文時代晩期の様相

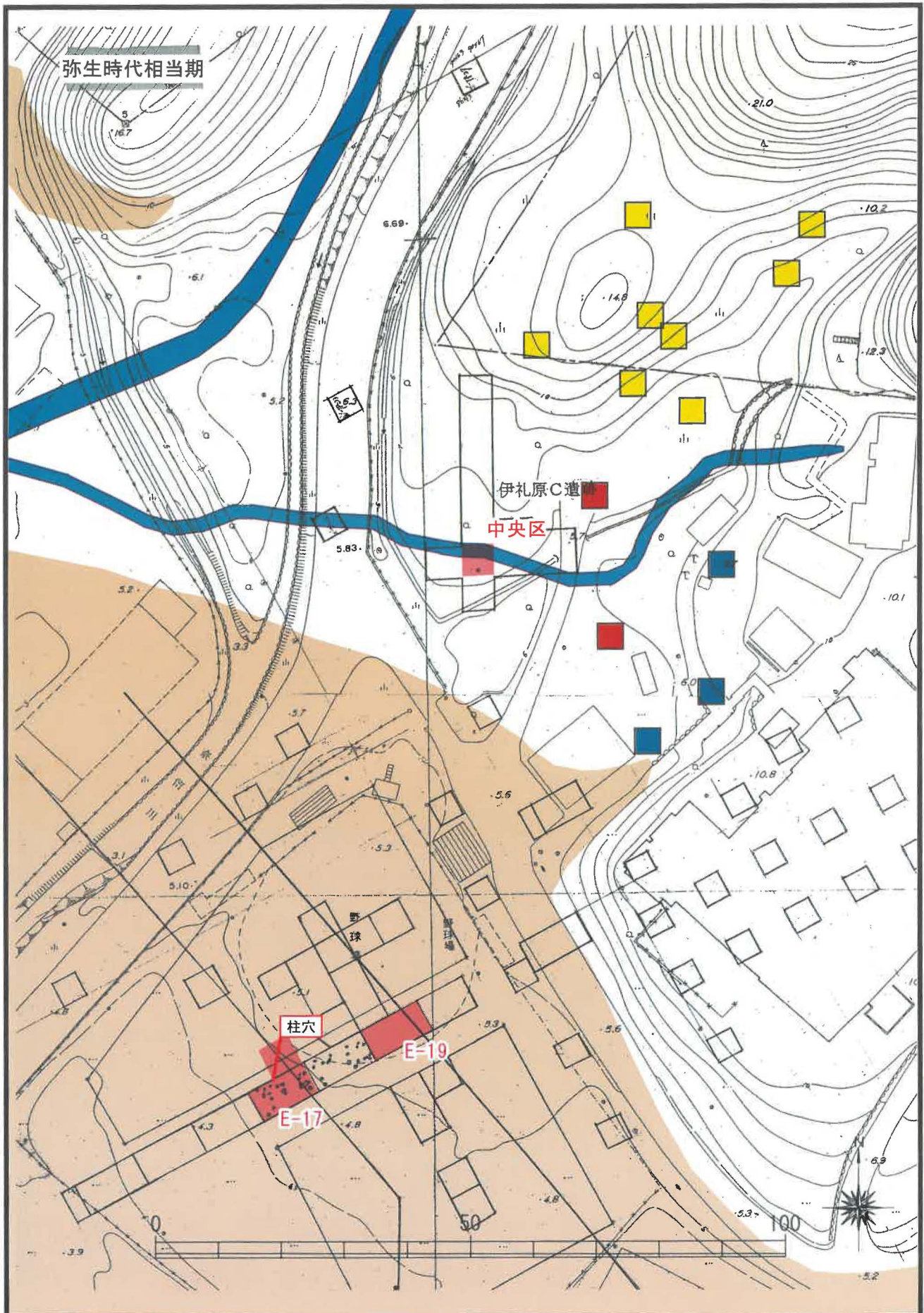


図18：弥生時代相当期の様相

25039

北谷町文化財調査報告書 第25集

い れい ばる
伊 礼 原 遺 跡

— 図 録 集 —

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会
発 行 年： 2006年（平成18年） 3月
沖 縄 県 北 谷 町 字 桑 江 226番 地
電 話 （098） 936－3490
印 刷： （有） S k i l l
沖 縄 県 読 谷 村 字 波 平 1732-1-203号
電 話 （098） 958－1515
